music
UP's
TAKE FREE!!
2020.8.20
Vol.190
GRANRODEO
Interview … OKAMOTO'S、BUCK-TICK、内田雄馬、HoneyWorks、松尾太陽、むぎ(猫)×つじあやの
Editor's Talk Session …『配信ライヴが今後のシーンにもたらすもの』／ music UP's Q! …『思い出深い一曲』

GRANRODEO

ちょいダサいけど、それができるのもロックの醍醐味

デビュー 15 周年イヤーを迎えた GRANRODEO のニューシングルは、アニメ『バキ』大擂台賽編 OP テーマ「情熱は覚えている」。闘争本能を絶やさないバキよろしくロックの情熱を滾らせたナンバーで、15 周年イヤーの火蓋を切る！

L→R：KISHOW(Vo)、e-ZUKA(Gu)

――アニメ『バキ』の OP テーマ「情熱は覚えている」について、それぞれが考える聴いてほしいポイントを教えてください。

e-ZUKA：変拍子のリズムかな？　2 番の A メロはタブラというパーカッションを使って、途中で一拍少なくなる変拍子になってるんですよ。そこは聴き応えがあると思います。あと、イントロと A メロのフレーズが印象的だと思います。

――イントロはシタールっぽい雰囲気がありますが、どんなふうに弾いているんですか？

e-ZUKA：E のキーなんですけど 4 弦をずっと鳴らしておきたくて、レコーディングでは D のキーにカポを付けて弾いたんです。それに 7 弦を足して。そうすると同じ音がずっと鳴っていて、ドローンみたいな感じになるんです。

――ドローン？

e-ZUKA：飛ぶドローンのことじゃなくて（笑）、三味線や琵琶でも使われる同じ音を鳴らしながら他の音を弾く奏法のことで、シタールっぽい感じが出せるんです。ライヴでどうやろうかと考えていたんですけど…YouTube で海外の人がコピーしてくれている動画を観たら単音で弾いていて、それだとやっぱり物足りないなぁと思って。そうしたら 2、3、4 弦だけを押さえられるショートカットカポというものが売られていたんですよ。

――そういうのがあったんですね。

e-ZUKA：それを最近買ったので、この曲だけそれを使ってみようかなと。

――歌とか歌詞について、“ここを聴け！”というところは？

KISHOW：歌に関しては《帯ニハ短シ襷ニハ長シ》と歌っているところの歌い方かな？　ちょっとふざけている感じだけど、この曲にはそれが相応しいというか、トータルで不思議な味わいがあるんじゃないかと思います。それと…例えば《find myself　いい機会》という歌詞を“ファインドマイセルフィー機会”と発音しているところ。僕は岡村靖幸さんが好きなんですけど、岡村さんが「Young oh! oh!」で《アクション映画》という歌詞を“アクションねいが”と発音しているんですね。意識してやっていることだけど、やっぱり岡村さんからすごく影響を受けているんだなと、改めて自分でも感じるところです。こういう歌い回しも含めて、楽しんでいただければ嬉しいです。

――では、「情熱は覚えている」という曲名に引っかけて、おふたりが心の中に持ち続けている情熱は何ですか？

KISHOW：歌うことは昔から好きで、今でも大好きだし、それを半分生業とできていることはとても幸せなことだと思っていて。だから、歌に対する情熱はずっとあるんだと思います。“もっと上手になりたい”とか、“もっとこういうふうに歌いたい”とか、“なんで俺はうまく歌えないんだ”という気持ちとは常に戦っていますね。よく一生勉強だと言いますけど、綺麗事ではなく本当にそうだと思います。ゴールはないなって。ひとつのことがなかなか長続きしない人間だけど、歌に対する情熱だけは絶えず燃やしていますね。

――e-ZUKA さんはギターですか？

e-ZUKA：悲しいことに、それしかないです（笑）。よく好きなことを仕事にするとつらいと言いますけど、全然そんなことはなくて。人の曲を聴いて“ここはどう弾いてるんだろう？”と考えながらコピーしたり、新しい弾き方を覚えたり…よく仕事場でギターを弾いているんで“すごく仕事してるな”と思われてるかもしれないけど、実は動画を観ながら他人の曲をコピーしているんですよ（笑）。焦燥感に駆られているというか、“今やらなきゃ、今やらなきゃ”という気持ちが小学生の時からずっとあるんです。そういうある種の中二病的なものが発揮されるのが、カップリング曲やアルバムに収録されるノンタイアップの曲ですね。僕が好きな古い曲からインスパイアされたり、それらへのオマージュを込めた曲を“この曲の元ネタは何だろう？”って探りながら聴いてもらえると楽しいと思います。

――今回のカップリング曲の「Scorn」はまさしくそういう曲ですね。

e-ZUKA：そうですね。L.A. メタルです（笑）。

KISHOW：僕は完全にMötley Crüeの「Kickstart My Heart」を想像しました。カップリングになるや否や、がっつりやってくるのはさすがだなって（笑）。僕はもうモトリーのヴィンス・ニールになったつもりで歌いました。

――歌詞は昨今のいろいろなことが考えられると思いました。世の中が重い空気なだけに、こういう曲はスカッとします。

KISHOW：歌詞の内容は自分でも説明できません（笑）。《我々ハ宇宙人デアル》と歌詞に出てくるのは宇宙船地球号みたいな、まさしく今こういうご時世だからこそですね。でも、タイトルの“スコーン”って美味しそうでしょ？　“軽蔑”とか“侮蔑”という意味があるんですけど、食べるほうのスコーンを想像されるのも面白いなと思って。

――D メロの裏で“何でもやってやるぜ！”と台詞みたいなのがあるのは？

KISHOW：台詞は歌詞カードには載らないんですけど、モトリーもそう言っていたから（笑）。ちょいダサいけど、それができるのもロックの醍醐味だって思うし。

――そのちょいダサなカッコ付けが、まさしく GRANRODEO らしいです。

KISHOW：ありがとうございます。ちょいダサイのがいいんです！

――あと、15 周年記念のトリビュートアルバム『RODEO　FREAK』も CD リリースされましたね。

KISHOW：カバーすることは今まで多かったけど、カバーされる側になるのは初めてなのですごく楽しみだったし、ワクワクしながら曲を待っている時間がとても幸せでした。それぞれ“こうくるか！”というのもあれば、“やっぱりそうだよね～”というものもあったし、同じ曲でも違う人が歌うとこんなに変わるんだなって。OxT の「変幻自在のマジカルスター」はオリジナルが完成形だと思っていたけど、これもすごくいいと思いましたね。MUCC は自分たちから“これをやりたい！”とシングル曲でも何でもない「メズマライズ」を選んでくれて、まさにドンピシャの選曲だったし、どれもすごく新鮮で、たくさんの刺激をいただきました。

――GRANRODEOの曲の新たな魅力も発見できますね。超特急のファンの女子がライヴに来てくれるようになるかも！

KISHOW：それはそれで嬉しいけど、実際にそうなったら戸惑うと思う（笑）。

取材：樗林史章

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

「情熱は覚えている」

Single　9/9 Release
Lantis
【初回限定盤】(CD+Blu-ray)
LACM-34008
￥1,900(税抜)

【通常盤】(CD)
LACM-24008
￥1,200(税抜)

『GRANRODEO Tribute Album "RODEO FREAK"』

Album　8/19 Release
Lantis
LACA-15824
￥2,500 (税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■ KISHOW…「TOUGH BOY」('87) ／ TOM ★ CAT
「アニメ『北斗の拳 2』のオープニング曲だったんで、これはもう世代ですね。僕らの同世代はみんな刺さってるんじゃないかな？　小さい女の人が大きいサングラスをして歌ってるんですど、めちゃくちゃカッコ良いんですよ。歌声もハイトーンですごくて！　ベストアルバムを買った記憶がありますね。中学の 1 年とか 2 年の頃だったから、よく休み時間に箒をギター代わりにして歌ってましたよ。弾けないくせに（笑）。そういうことをやった初めての曲ですね。この曲をカラオケとかで原曲のキーのまま歌えると、“まだ GRANRODEO で歌えるな”っていう判断材料にもなってます（笑）」

■ e-ZUKA…「闘牛士」('78) ／ Char
「唯一、ギターを弾きながら歌える曲です（笑）。ライヴでもやったことがあるし。当時って『ザ・ベストテン』とかにもロック系の人が出るのが珍しかったから…あれは『夜のヒットスタジオ』だっけな？　最後にギターを投げたんですよ。“おー、ロックだ！”って思いましたね（笑）。ギターは親戚のお兄ちゃんがやってたから始めたんで、特に誰かに憧れたってわけではないし、そういう部分での影響はないんですけどね。でも、ギターを弾いている人が出てる番組はビデオに録画してまで全部観てましたよ。TWIST の松浦善博さんとかサザンオールスターズの大森隆志さんとか。とにかくギターを弾いている人が気になってましたね」

ネクライトーキー

ゴーゴートーキーズ! 2020
野外音楽堂編

大阪
9.12(土)
開場 15:30
開演 17:00
大阪城音楽堂

東京
9.27(日)
開場 15:30
開演 17:00
日比谷
野外音楽堂

ローソンチケットにてチケット好評発売中!
チケットの詳細は ローチケ ネクライトーキー 検索

KAMIYADO

神宿 HALL TOUR 2020

静岡
9.05(土) 開場 16:45 開演 17:45
静岡文化会館 大ホール

兵庫
9.06(日) 開場 16:45 開演 17:45
神戸国際会館こくさいホール

神奈川
9.13(日) 開場 16:45 開演 18:00
パシフィコ横浜 国立大ホール

8/22(土)10:00よりチケット一般発売開始!
チケットの詳細は ローチケ 神宿 検索

公演・チケットの詳細は
ローチケ(webサイト)にて!
https://l-tike.com/
※公演が中止・延期になる可能性がございますので詳細は各公演の公式HPをご確認ください。
LAWSON TICKET ローチケ

CONTENTS

music UP's Vol.190　2020.8.20

■ Interview

music UP's Q! …『思い出深い一曲』

GRANRODEO

OKAMOTO'S

0 GRANRODEO
4 BUCK-TICK
6 内田雄馬
8 畠中 祐
10 松尾太陽
12 MORISAKI WIN
14 むぎ(猫)×つじあやの
16 尾崎由香×コレサワ
18 SIZUKU with MAZAKI
34 HoneyWorks
36 Mary's Blood
38 vivid undress
40 Oh my!
42 Gorilla Attack
44 OKAMOTO'S

22 Pop'n' Roll Special Photo　江嶋綾恵梨（26時のマスカレイド）
24 『MUSIC SUPPORTERS』 カネヨリマサル、さとうもか
26 『Key Person』 根本 要（スターダスト☆レビュー）
28 Editor's Note & Listener's Voice &読者プレゼント
30 Editor's Talk Session『配信ライヴが今後のシーンにもたらすもの』
33 全日本歌謡情報センター編集長 仲村 瞳の『スターの証明』 弘田三枝子

※ music UP's は毎月 20 日発行です(地域により多少遅れる場合があります)。全国 300 カ所以上のライヴハウス・新星堂・TOWER RECORDS・HMV・disk union・音楽スタジオなどで配布しています。配布店舗はmusic UP's の WEB をご覧ください。

© ジャパンミュージックネットワーク株式会社
本誌に掲載している記事、写真等の無断複写、複製、転載を禁じます。

music UP's

■発行
ジャパンミュージックネットワーク株式会社
〒107-0062
東京都港区南青山 6-10-12 フェイス南青山
TEL：03-6712-6490
※広告に関するお問い合わせ
TEL：03-6712-6579(music UP's)

【発行人】
今井壱克
【JMN 統括編集長】
烏丸哲也

【編集】
■ music UP's / OKMusic
・編集長
石田博嗣
・スタッフ
千々和香苗　岩田知大
■ BARKS
・編集長
梶原靖夫
・スタッフ
森本 智　星出智敬
宮川直子　堺 涼子　服部容子
髙橋ひとみ　井上 舞　安藤沙耶佳
■ Pop'n'Roll
・編集長
鈴木健也
・スタッフ
鶴岡 舞
■全日本歌謡情報センター
・編集長
仲村 瞳
・スタッフ
西角郁哉　本多 秀

【営業】
小田 新

【WEB】
田中功雄　瀬田拓己　上月悠平

【ライター】
池田スカオ和宏　石角友香　キャベトンコ
樗林史章　清水素子　土屋恵介　土屋京輔
舟見佳子　帆苅智之　山口智男　吉田可奈

【印刷】
昭栄印刷株式会社

music UP's サイト
http://www.music-ups.jp

BUCK-TICK

現在的視点と普遍性を同化させた、静穏たる BUCK-TICK を表す楽曲

BUCK-TICKが待望のシングル「MOONLIGHT ESCAPE」をリリースする。テレビ東京 水ドラ 25『闇芝居(生)』エンディングテーマであるカップリング曲「凍える」と併せ、彼らの揺るぎない世界観を深遠に表現した同作。来るアルバム『ABRACADABRA』を想像しながら綴られた物語を熟考したい。

L→R　今井 寿(Gu)、ヤガミ・トール(Dr)、櫻井敦司(Vo)、樋口 豊(Ba)、星野英彦(Gu)

「MOONLIGHT ESCAPE」に至る BUCK-TICK の歩みを振り返る

新たなアルバム『ABRACADABRA』が 2020 年 9 月 21 日に発表されることがすでにアナウンスされているが、前作『No.0』から約 2 年半という期間が彼らにしては決して短くはないだけに、その事実にも何らかの意味を見出したくなる。制作から実演を終えるまでの『No.0』に伴う一連の活動があまりに濃密だったがゆえ、ある種の充電期間がとられたということなのか？　当初からの計画通りのことだったのか？　それとも他に理由があるのか？　その真相はメンバーの発言を待ちたいところではあるものの、2019 年 5 月 25 日と 26 日に行なわれた千葉・幕張メッセ公演『ロクス・ソルスの獣たち』の直前には、シングル「獣たちの夜／RONDO」がリリースされている点も見逃せない。

「獣たちの夜」は"YOW-ROW　ver."が『ABRACADABRA』に収録されるが、この楽曲自体は今井 寿がストックしてあったリフのアイディアをもとに再構築したものであり、その時点では必ずしも次なるアルバムの全体像を見据えたものではなかったという。しかし、この退廃的躍動感とでも言うべきマテリアルは、ポジティブな意味での BUCK-TICK の変わらなさを伝えるとともに、未来への期待感を大きく高めるものでもあった。

それから約半年を経た 2020 年 1 月 29 日に発表になったのが、シングル「堕天使」である。ギターのストロークから始まる、シンプルなロックチューンだ。当然、この頃にはアルバムの内容が具体的に見えてきていたはずで、その意味では実質的な先行第一弾だったととらえていいだろう。年末の恒例ツアー『THE DAY IN QUESTION 2019』のステージでも先駆けて披露されていた。

本来であれば、5 月からはファンクラブ会員及びモバイルサイト会員限定のツアー『FISH TANKer's and LOVE & MEDIA PORTABLE ONLY LIVE』が開催され、夏にアルバムがリリースされるはずだったが、このコロナ禍で諸々の作業が中止・延期になった。レコーディングのスケジュールも再調整されたようだ。そんな紆余曲折を経て、今回のシングル「MOONLIGHT　ESCAPE」が発表になる。

エレクトロとオルタナ、聴き手に訴えかける歌世界

作曲した今井によれば、アルバムに向けた曲作りを進める中で、最初に出来上がったのが「MOONLIGHT　ESCAPE」だったという。実は「堕天使」をシングルリリースする際、この曲も候補に挙げられていた。エレクトロとオルタナ、キーワード的にはそのふたつがあったようだが、ギターが前面に出る印象はない。「堕天使」や「獣たちの夜」とは対照的だ。サウンドの質感で言えば、切なさのあるメロディーラインが軸にありながら、爽快さも感じさせる。冒頭に記したような安心感は、郷愁感と同義でもある。どこかで触れたことのあるような心地良い音空間が存在し、それでいて新たな世界へと導いていく。聴き手によっては、ポップな楽曲と受け止める人もいるだろう。

しかし、そういった包み込むようなやさしさは、櫻井敦司が綴る歌詞を読み込んでいくと、二律背反のようにも思えてくる。まずタイトルだけでも意味深長さが窺えるだろう。"MOONLIGHT"とは月光であり、ロマンチックな雰囲気も漂う。その一方で"ESCAPE"とは、何らかの捕らわれている状況からの逃避・逃亡である。月光の輝く夜に何が起こったのか？　何かしらの抗えない環境下にいる主人公の想いを映し出したものなのではないか？　歌われる言葉を繙いていくと、その予想は現実味を帯びてくる。

《踊り出すんだ　LAST　NUMBER》と始まる歌。なぜ"最後"の曲で踊り出すのか？　それまで抑えていた気持ちを振り切るかの如く、音楽に身を委ねているように見えてくる。とはいえ、ダンスをするというのは比喩だろう。従前とは異なる行動へと一歩踏み出すことかもしれない。続く《神様お願いだ　僕の事をゆるしてね》という一節で表されているのは、よくある神頼みではなく、神に願うほどの重大事であり、ある種の"罪"への許し・赦しを乞うシーンなのではないかとも思える。

《たった一人だ　旅立ちだ》と自らに言い聞かせ、《夜が明けるその前に》逃避をする。《パパママおやすみ》と告げ、《僕の事を　忘れないで》と嘆願もする。状況的には、ある家族からひとりの子供が離れていくところを描いたものだろうと解釈できる。ただ、それが単なる家出や親離れではないことも推察できる。《溢れる程　愛を抱きしめて》、そして《悲しみの無い世界へ　永遠に》と"ESCAPE"するとは何を意味するのか？　しかも、包まっていたマントを翻し、"タカ‥ク　タ‥カ‥　ク"舞うのである。言葉としては"高く"のはずだが、あえてこういった表現をしているところは、重要なポイントになるに違いない。

ここで結論めいたことは断言できないものの、少なくとも若者を取り巻くひとつの社会問題に言及するストーリーが描かれているのは確かだろう。いくつも光景は思い浮かぶが、それゆえに「MOONLIGHT ESCAPE」が自分の中で幾度も反芻してしまう。この歌に込めた櫻井の真なる想いも訊いてみたくなる。

「凍える」に表現された、寂寥感を伴う問いかけ

カップリングに収録された「凍える」は星野英彦が作曲を手がけたもの(『ABRACADABRA』には"Crystal CUBE ver."を収録)。スローテンポでじっくりと聴かせる楽曲で、シンセアレンジも含めて、1980 年代初頭のニューロマンチック系アーティストによるバラードに通じるテイストも感じ取れる。寂寥感を湛えた旋律と音像がジワジワと染み入ってくる。もし、この曲の MV も制作されるのであれば、また興味深い映像になりそうだ。

偶然かもしれないが、「凍える」の歌詞の物語も「MOONLIGHT　ESCAPE」とそう遠くない内容と受け止めた。《死んでいる》という歌い出しは衝撃的だったが、《生きてもいるか》という返しに複雑な心境を突きつけられる。自分は何者であるのか？　自己同一性というよりも、家庭のような極めて身近な環境における存在価値を問いかける、言わば救いを求めるような歌に思えてくる。

《子守唄を聴かせて》とせめてもの希望を嘆願し、《罪だとは言わないで》というかすかな願いもある。"凍える月"は"青白く震えて"もいる。このレトリックが表すものに想いを巡らせてみれば、絶望的な状況に置かれた幼少期の少年・少女の姿が重なってくるだろう。"沈みたい""眠りたい""ただそれだけ"というフレーズが悲哀に満ちている。

終盤に出てくる"ララ　ラララ"というリフレインにも寂しい描写が感じられる。「MOONLIGHT　ESCAPE」にも《ララ反射》という言葉が登場するが、櫻井が音としての"LaLa"を歌詞に用いる時、どちらかと言えば、享楽的な空気を生み出すのではなく、ネガティブな感情を浄化させるような役割を担わせているケースが多い気がするのだ。もちろん、音とリズムを意識した配列でしかない例もあるだろうが、ここはそう解釈したくなる前段がある。

来るアルバム『ABRACADABRA』がどのようなものになるのか、既発のシングル曲からはなかなか想像できないだろう。明らかにされた収録曲のタイトルだけでも惹きつけられるものが多く、これまで同様に驚かされる要素がさまざまに内包されているはずである。ただ、ひとまず今回の「MOONLIGHT ESCAPE」と「凍える」に関して言えば、一枚のシングルに収められた連曲のような構成で聴かせたのは、それがバンド側の明確な意図だったとすれば、頷かされる選択だ。これをライヴの場で実際に耳にした時には、また異なる感情も込み上げてくるかもしれない。

文：土屋京輔

OKMUSIC
この記事の全文を公開中!!▶

「MOONLIGHT ESCAPE」

Single　8/26 Release
Lingua Sounda ／
Getting Better Records

【完全生産限定盤 A】
(SHM-CD+Blu-ray)
VIZL-1781
￥2,380(税抜)
【完全生産限定盤 B】
(SHM-CD+DVD)
VIZL-1782
￥1,880(税抜)

【通常盤】(CD)
VICL-79006
￥1,000(税抜)

『ABRACADABRA』

Album　9/21 Release
Lingua Sounda ／
Getting Better Records

【完全生産限定盤 A】
(SHM-CD+Blu-ray)
VIZL-1787
￥5,500(税抜)
【完全生産限定盤 B】
(SHM-CD+DVD)
VIZL-1788
￥5,000(税抜)
【通常盤】(SHM-CD)
VICL-70244
￥3,000(税抜)
【完全生産限定アナログ盤】
VIJL-60228～9
¥4,500(税抜)
※2LP
【完全生産限定カセットテープ】
VITL-70244
¥2,800(税抜)

内田雄馬としてまた新しいチャレンジ

6thシングル「Image」の表題曲は本格的ダンスナンバーであると同時に、彼の表現に対するストイックさが感じられるクールな楽曲。そして、カップリング曲「You Are Special」ではファンに対する個人的な想いを表現。また一歩、アーティストとして歩みを進める一作となった。

――「Image」はミドルテンポのEDMで、MVでは一曲を通して踊っている姿が印象的でした。

「今回はノンタイアップでのシングルということで、楽曲の方向性を自由に選択できるタイミングでした。なので、この機会に内田雄馬としてまた新しいことにチャレンジしたいと思っていて、それが表題曲でダンスナンバーを歌うということだったんです」

――昨年から今年にかけて開催されたツアー『1st LIVE TOUR「OVER THE HORIZON」』でもダンスパフォーマンスが好評で、"内田雄馬=踊れる声優"というイメージを持った人も増えたと思うので、その期待に応える曲でもありますね。

「そう思ってもらえたら嬉しいです。歌って踊るのは、自分のパフォーマンスのベースにしていきたい部分ですから。MV撮影にはライヴでたくさん踊った経験を活かすことができたし、出演してくれたダンサーチームもツアーの時と同じメンバーなので、いいチームワークを保ったまま、リラックスした気持ちで挑戦できましたね」

――また、「Image」のヴォーカルは全体的に透明感のある歌声という印象があって、いつものアツく湧き上がるような歌い方とは違うテイストで新鮮でした。

「今までの楽曲ではアツさやエネルギーを込めて、それが聴いてくださった方の力になるようにアプローチをしてきましたが、今回はどちらかと言うと、自分と…聴いてくれた人にとっても、自分自身と向き合うことにつながる曲であったらいいなと思ったんです。だから、この楽曲が力を与えるというよりは、その人が何かを選択しなければいけない時や、自分を奮い立たせたい時のきっかけになったらいいなと。アツくなりすぎると自分をコントロールできなくなるけど、客観的な視点を持ったり、感覚を研ぎ澄ませる瞬間はとても冷静になるじゃないですか。そういうニュアンスを歌の中にも込めさせていただきました」

――歌詞からは内田さんの仕事に対する向き合い方や、役に入り込んでどんどん研ぎ澄まされていく瞬間のことが感じられました。

「まさにそうなんです。仕事に向き合う時の自分の思考の様子が、すごく連想される歌詞になっています。僕の仕事はできるだけたくさん想像して選択肢をいっぱいまで広げて、最終的に選択した答えをさらに磨き上げていくことが大事で、それは歌でも芝居でも共通するところです。僕が仕事をする上で普段やっていることや、大事にしている原点を思い出させてくれる曲になっています」

――内田さんが出演したアニメ『宝石商リチャード氏の謎鑑定』ではないですが、宝石は掘り起こした時はゴツゴツしていて、それを磨くことで商品価値が高まるみたいな。

「"原石"という言葉があるくらいですからね。見つけた答えでどうアプローチしていくかも大事だけど、そこに至るまでにどれだけたくさん可能性を模索して思考するかも大事で。例えば、声優の仕事ならシーンの空気感やその時の状況、誰と話しているのか、相手を好きなのか嫌いなのか…いろいろ想像して演じるキャラクターの日常や経験を追体験することで、その台詞が生まれた瞬間を明確にとらえることができるんですけど、それには本当にいっぱい想像を膨らませないといけないんですよ」

――マイクの前に立った時はどんなことを考えますか？

「作品や役柄によって違いますけど、僕の個人的な認識としては、基本的にはキューが出たら、もうその役になっているという感覚です。だから、実際に台詞を言って"もうちょっとこうだったかな？"とか"こう言ったらカッコ良いかな？"と考えてしまったとしたら、それは役に入っていない証拠だと思っています」

――なるほど。マイクの前に立つまでにしっかり磨き上げておくと。

「そうなんですけど、それも答えのひとつでしかなくて。いくら自分の中で磨き切ったものであったとしても、現場で違うものを求められることもあるんです。でも、声優という仕事としての面白さはそこからで、現場でもらったディレクションをその場で理解して、それまでに考えたことを踏まえて、キャラクターを通してどう表現できるのかを考えるのが、すごく面白いし楽しいんです」

――役に入り込みすぎて、役から影響を受けてしまうこともありますか？

「演じるキャラクターも生きているので、役からの影響はやっぱり受けますね。それも含めていろいろな影響を受けた自分の存在とか、選択の積み重ねによる思考が、さらに相手に影響を与えていっているわけで、音楽はそういうものが凝縮されたもののひとつだと思っています。今までの楽曲は思考した先にある感情を伝えることが多かった…例えば、デビュー曲の「NEW WORLD」(2018年5月発表)は新しく踏み出した世界でどんな出会いがあって、自分を変えてくれるかもしれないという期待を歌っていました。今回の「Image」は選択をする前の段階で、試行錯誤の中でどういった選択をしているかを歌っています。今の時代、自分の考えをどうまとめたらいいか分からない人が結構多いと思うんです。僕自身も以前はそうでしたし。どう思考したらいいか分からなくて、不安になることが多かったんです。そういう人がしっかり自分で選択を行なうためのきっかけを、この曲には込めたいと思いました」

――カップリング曲に話を移しますが、「SummerDay」は夏らしくてライヴのイメージですね。

「夏に出ることが決まった段階で、夏らしい曲、ポジティブな楽曲をやりたいと話をして決まりました」

――夏はお好きですか？

「もともとはそうでもなかったんですけど、昨年ダイビングのライセンスを取得してからは夏が待ち遠しく感じるようになりました」

――どういうきっかけでライセンスを？

「ダイビングがテーマの作品に携わったのがきっかけでした。よく"新しいことにチャレンジしよう"とみなさんに言っているわりに、自分は趣味の面であまりできていないと思ったんです。なので、昨年思い切ってチャレンジし、ライセンスを取得しました。今年はこういった状況下なので、せめてイメージすることで楽しみたいと思います」

――もう一曲の「You Are Special」はアコースティックの温かいムードの曲ですね。

「これは"焚き火の前で歌っているような楽曲"と、大まかにニュアンスをお伝えしたところから制作がスタートしました」

――キャンプみたいな？

「いえ、旅の途中みたいなイメージです」

――『ムーミン』に出てくるスナフキンみたいな？

「そうですね(笑)。1曲目はお芝居とか歌など、仕事をする上で思考する自分を投影していて、2曲目は夏の日のポジティブな自分…それもみなさんが持ってくださっている内田雄馬のイメージを要素として取り入れて、よりポジティブな姿を見せたいと思ったんですよ。そして、この3曲目に関しては自分の中にある心象風景というか、ごく個人的な想いにフォーカスしたいと。普段、個人内田雄馬が考えていることを楽曲に込めさせていただきました。僕の見え方は人によっていろいろだと思うけど、本来は焚き火の前で語っているのが好きなタイプの人間なんです。…と言うと、少し気取りすぎですかね(笑)」

――物静か？

「そうなんです。静かな空間が結構好きで。その上で"あなたと私は一緒なんだよ"という気持ちを、改めてこの曲に入れたかったんです。こういう人前に出る仕事をしている人間はどうしても特別に思われがちですけど、僕もみなさんと変わりないひとりの人間なんだよと」

取材：樗林史章

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

「Image」

Single 8/26 Release
KING RECORDS
【期間限定盤】(CD+DVD)
KICM-92059
¥1,800(税抜)

【通常盤】(CD)
KICM-2059
¥1,300(税抜)

music UP's Q! 今月のお題：『思い出深い一曲』

■「15の夜」('83)／尾崎 豊

「この曲がなかったら歌を好きになってないと思うので。というのも、僕はもともと歌というか、音楽にまったく興味がなかったんです。でも、『スクール・オブ・ロック』という映画を観てドラムをやりたいと思って、吹奏楽部に入ったんですね。そこでは歌はやってなかったんですけど、中1の時かな？　たまたま部活で「15の夜」の替え歌を歌って遊んでいたら、先輩が"歌、うまいね"って言ってくれたんです。それまで褒められたことがなかったんで褒められたのが嬉しくて、その先輩が好きな曲をカラオケで歌うようになったのが、歌い始めたきっかけなんです。でも、なんで「15の夜」だったのかな？　きっと母親が好きで聴いていたのを覚えていたんでしょうね。だから、あの時に「15の夜」の替え歌を歌ってなかったら、僕は今ここにいないかもしれないです(笑)」

畠中 祐

ひとりひとりに届けるような曲にしたいと思った

『ウルトラマンZ』のウルトラマンゼット役、アニメ『甲鉄城のカバネリ』の生駒役などで人気急上昇中の声優・畠中　祐が、4th シングル「HISTORY」をリリースした。昨年の 1st ワンマンライヴ『TASUKU HATANAKA 1st LIVE -FIGHTER-』をはじめ、さまざまな経験を糧に制作された今作には自身の作詞曲も収録。歌うことへの想いと意味が詰め込まれた作品について訊いた。

――「HISTORY」はこれまでのシングル表題曲とは雰囲気が違い、温かみのあるEDM ナンバーですね。

「ちょうど 1 年前に初のワンマンライヴを行なったのですが、目の前でお客さんの表情を観ながら歌う経験をして、心の底から歌うことが楽しいと思ったんです。フェスやイベントで歌うことも楽しかったけど、“やってやるぞ！”とか“爪痕を残してやる！”と気合いも入っていたので、どこかガツガツした感じだったんですね。もちろんワンマンでもそういう気持ちはあったけど、お客さんが本当に喜んでくれていたり、感動してくれたり、僕の声や表情で一喜一憂しながらペンライトを振ってくれて、“僕の音楽でこんなに楽しんでくれるのか!?”と思って、あの光景を観た時に“楽しい”という気持ちの原点に立ち返れました。でも、それは目の前にいるみなさんとの空間や気持ちの共有がなければ成り立たないもので。だから、“これからもあなたと一緒に進んで行きたいし、頑張っていきたい。よろしくね！”と。その気持ちを大勢に向けるというよりも、ひとりひとりに届けるような曲にしたいと思いました」

――初ワンマンは最初から楽しかったですか？

「ライヴが始まる直前までは不安しかなかったです。もともと自分にすごく自信を持っている人間じゃないし、いいものが届けられるか不安で。なので、自分で言うのはあれですけど、ものすごく練習しました。それでも不安は解消されず…」

――実際にステージの幕が上がって、お客さんの顔を観た時の気持ちはどうでしたか？

「その瞬間、不安だった気持ちが全て吹っ飛びました。ライヴは本当に楽しくて。お客さんは味方なんですよね。“みなさんに本当に納得してもらえるのか？”と評価ばかりを気にしていたから、敵とまでは言わなくても、いつの間にか壁に感じていたんだと思います。正直言って、細かい失敗はいっぱいあったんですけど、それも含めて生のライヴの良さとして受け止めてくれました。バンドメンバーやダンサーのみなさんの存在もすごく心強かったです」

――それで、この人たちと歴史を作っていきたい…と。そんな「HISTORY」のレコーディングの時は、やはりステージから観た客席の光景を頭に浮かべていました？

「はい。その光景を浮かべながら、そこにいるひとりひとりに向けて歌う意識でした。“あの時、あの人と目が合ったな”とか、来てくれたひとりひとりの表情を思い浮かべながら歌いました。実際、ライヴの時は客席全体がすごくよく観えてたんですよ。もし次にどこかで会ったら、きっと“あっ！　ライヴに来てくれた人だ”って分かると思います(笑)」

――この曲の MV ですが、おじいちゃんおばあちゃん、子供も出てきたのが印象的でした。

「僕は自分の好きな音楽を男女の性別や世代に関係なく、みなさんと共有できることの喜びや楽しさを感じているので、そういう僕の気持ちが表れている映像になりましたね」

――インスタント写真が出てきますが、それも温かみがあり、曲の雰囲気とも合っていますね。

「確かにそうですね。MV の最後に一冊のアルバムを作るんですけど、デジタルで撮ってデータを保管するのではなくて、撮った写真を一枚一枚見ながら貼っていったんです。アナログな手作業でしたけど、どんどん心が込められていくような気持ちになって、物として残るのは素敵なことだと改めて思いました」

――カップリング曲の「Regret」は A メロが台詞っぽくて、曲としてとても面白いですね。

「実は今作は一枚を通してのテーマがあるんですよ。「HISTORY」は僕とあなたの歌で、「Regret」は僕と僕の歌。そして、3 曲目の「ボトルメール」はあなたとあなたの歌なんです」

――僕と僕の歌というのは、自分の内面と向き合うみたいな？

「そういう感じです。初ワンマンの話で自分に自信が持てなかったと言いましたけど、僕は結構ネガティブな性格なんですね。そこでプロデューサーからの提案で、自分の中にあるネガティブなものをもとにして曲を作ろうということになったんです。で、自分の中から浮かんだネガティブな言葉をありったけ書き出して送ったら、僕が思っていたより何倍も暗い歌詞になってしまって(笑)。でも、こういう感情って聴いてくださるみなさんの中のどこかにはあるものだと思うんです。一日の中で落ち込む瞬間もあれば、美味しいものを食べてテンションがアガる瞬間があったりする…そういう気持ちの起伏の中から、落ち込んだ瞬間の気持ちを手繰り寄せるようにして、なんとか歌えたかなって思いますね」

――3 曲目の「ボトルメール」はご自身が作詞を担当されていますが、タイトルの“ボトルメール”は瓶に手紙を入れて海に流すものですよね。

「そうです。歌詞を書くことになった経緯は、この曲の制作途中で自粛期間に入ってしまったことで。本来は自分で書く予定ではなかったんですけど、自粛期間でたっぷり時間ができたから、その時間を使って歌詞を書いてみないかと言われて。その時にいただいたテーマが“あなたとあなたの曲”というものでした」

――自粛期間中のどういう経験がこの歌詞につながったのですか？

「自粛期間中、SNS がすごく注目されましたよね。うたつなぎをはじめ、アーティストさんが新曲を作って披露したり、普段はできないセッションをしたり。そのひとつに、セカイイチの岩崎　慧さん、Keishi　Tanaka さん、UNCHAIN の谷川正憲さん、LEARNERS の紗羅マリーさんら 1982 年生まれのアーティストが集って作った「Baby，Stay　Home」という曲があって、それにすごく感銘を受けたんです。その曲に参加された the telephones のドラマーの松本誠治さんと知り合いなので、曲を聴かせていただいたら、マジですごくいい曲で！」

――ソウルテイストのハートウォーミングな曲ですよね。

「はい。最初は誰に届くかとか関係なく、自分たちが“歌いたい”とか“曲を作りたい”という純粋な気持ちから始まって、それが回り回って僕のもとに届いて、救われた気持ちになった…それってすごく素敵なことだと思ったんです。本来の音楽って、そういう純粋な気持ちや物作りに対するワクワクの詰め合わせなんだと改めて知らされた気がしたというか。なので、“発信したものは必ず誰かのもとに届くから、意味のないことなんてないんだ”って言いたいと思ったんです。誰に届くか分からないけど、その気持ちをメッセージとして届けるという意味でボトルメールに例えながら、昨年 11 月にジャケット撮影で行ったグアムで見た海辺のきれいな光景やどこまでも続く長い一本道とか、そういう風景と重ね合わせながら歌詞を書いていきました」

――ここからまた新たな一歩を踏み出すわけですが、今後の活動についてはどんなふうに考えていますか？

「今まで通りファイティングポーズは崩さずに、“やってやるぜ！”という気持ちは持っていたいですね。あと、こういう期間を経て“共有できるということは、なんと掛け替えのないことか！”と改めて思いました。僕らはどうしようもなくつながりたい生きものなんだとも。なので、自分も楽しみながら、その楽しさを応援してくれるみんなともっともっと共有していきたいですね」

取材：樗林史章

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

「HISTORY」

Single　8/19 Release
Lantis
【初回限定盤】(CD+Blu-ray)
LACM-34007
¥2,200(税抜)

【通常盤】(CD)
LACM-24007
¥1,300(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■「愛し君へ」('04)／森山直太朗
「ちょっとした瞬間に顔が森山直太朗さんに似ているって言われることがよくあって、それを意識しているわけではないんですけど、直太朗さんの歌ってすごく歌いやすいんですよ。学生の時に文化祭のカラオケ大会で、この曲を歌って優勝したんです。テレビでつるの剛士さんがカバーして歌っているのを観て、“あっ、この曲を歌おう”と思っただけなんで、特に深い思い入れがあるわけじゃないんですけど(笑)。でも、自分にとって特別な曲ではあるので、カラオケとかで“ここは絶対にキメないといけないだろう”という時には、「愛し君へ」を歌いますね」

“今”だからこその本名で挑むソロデビュー

超特急のバックヴォーカルとして歌唱を一手に担うタカシが、本名の“松尾太陽”としてソロデビューを果たす。“City Pops”をテーマにしたミニアルバム『うたうたい』には、黎明期の J-POP をルーツに持つ彼だからこその世界が凝縮されている。

――待望のソロデビューですが、今のコロナ禍がなければ、もしかしてこのタイミングでのデビューもなかったんじゃありません？

「昨年の９月に『Utautai』というソロライヴを開催して、超特急でお世話になっているチームとは別の音楽チームの方々とお仕事させていただいたんですね。そこで披露した僕が初めて作詞作曲を行なった２曲の制作を通して、ここで終わりにするのはもったいないっていう話になったんですよ」

――その音楽チームを引き継いで、ソロデビューするのはどうだろうかという話になったんですね。

「はい。マネージャーさんからも“やってみない？”って感じで言っていただけて。もちろんすごくありがたくて嬉しかったんですけど、やっぱり当初はとても不安がありました。今年になって新型コロナウイルスの影響で、エンタメにも大きな余波が来るような事態になってしまったじゃないですか。僕も超特急も２カ月くらい自宅で過ごすことになったんですけど、その時にひとりで考える時間が圧倒的に増えたんです」

――どんなことを考えました？

「これまで歌とかパフォーマンスっていう、いろいろなエンターテインメントを超特急で届けてきたけれど、自分がソロデビューすることになったら、超特急に加えて松尾太陽個人としても音楽を提供できるし、より多くの人にエンターテインメントを届けられるんじゃないかって考えたんです。今はライヴもできないし、直接ファンのみなさんに会うこともできない。だったら、せめて音楽を聴いてる間だけでも、今の現実を忘れさせるような、そんな手段をひとつでも増やしたいと思ったんです。それがきっかけで、ソロデビューというものに対しての想いが強まっていきました」

――この状況下ではアーティスト活動がどうしても限定されてしまうから、少しでも触れてもらえる選択肢を増やしたかったと？

「はい。自宅での待機が明けてから、昨年お世話になった音楽チームの方々と毎日のように話し合って、“こういう楽曲がやりたい”っていうアイディアを出させてもらったり、“今はどういう音楽が流行っているんだろう？”っていうのをディレクターの方たちとも研究させてもらったり。結果、自分の中に強く根づいている昔ながらの J-POP を狙っていきたいということになったんです」

――デビュー作『うたうたい』のテーマにもなっている、いわゆる“City Pops”というところですね。『Utautai』でも、はっぴいえんどやシュガー・ベイブをカバーしていたりと、太陽さんのルーツは平成生まれとは信じられませんが、周りの大人にも“太陽くんは本当に趣味が渋いね”とか言われませんでしたか？

「言われました（笑）。僕、洋楽に関してはあまり詳しくはないんですけど、J-POP に関してはディレクターさんと同じくらいの曲数を聴いていて、『Utautai』の時にも驚かれた記憶があります。なので、今度のミニアルバムも“City Pops”を軸に、自分と同年代の人はもちろん、さらに幅広い世代の人もに聴いていただけるような作品にしたいっていう話はしました」

――結果『うたうたい』には大塚 愛さん、堂島孝平さん、She Her Her Hers さんと、豪華なアーティスト陣が楽曲を提供してくださっていますね。

「どなたにお願いするかというのは、基本的にチームの方々にお任せするかたちだったんですけど、リスナーとして普通に聴いていた方ばかりだったんで、“えっ、やってくださるんだ!?”って驚きましたね。もちろん感謝の気持ちでいっぱいになったし、リード曲を Vaundy さんがやってくださるって知った時も、“うわっ、そうなんや！”って普通にびっくりしちゃったんです。あんまり関わることはないんじゃないかと思っていたアーティストさんだったから。しかも、Vaundy さんが最初に発表した「東京フラッシュ」はシティポップなんだけど“NEO”って感覚なんで、冷静に考えてみたら“いいかもしれん！”って」

――納得の人選ですよ。しかも Vaundy さんは、なんと 23 歳の太陽さんよりも年下だという。

「そうなんですよ！　今まで常に自分が最年少だったし、ましてや曲を提供してくださる方は僕よりも上の世代ばかりだったので、やっと“令和になったんだな”って感じましたね。時代が変わってきてるなって、いい意味で不思議な感覚になりました」

――レコーディングもこれまでとはかなり違ったのでは？

「そうですね。超特急のレコーディングではメンバーのみんなの声があとから入ることを想定して歌うので、まずそれがない。今までは A メロ、B メロ、サビってブロックごとに順番に録っていたのが、「Sorrow」みたいに頭から最後まで、感覚を忘れないうちに流れでツルッと歌ってる曲もあります。あとは、何より…“超特急のタカシ”でやるのと“松尾太陽”でやるのとでは、名義の違いだけとはいえ、僕の気持ち的にはかなり違うんですよ。今回のソロだって、“超特急タカシ”として始めることもできたんでしょうけど、個人的には超特急は5人いて超特急だし、メインダンサーがいてのバックヴォーカルだという気持ちが強いんです。もちろんバラエティーとかドラマとか、全員で出るのが難しいものに超特急名義でそれぞれ出るのは全然問題ないんですが、僕の場合は“超特急タカシ”でソロ活動するのは、なんだか保険をかけているような感覚になってしまうなと」

――分かります。超特急の看板に甘えているというか、最初から下駄をはかせてもらってる気分になるというか。

「そうなんですよ！　自分が成長するため、ヴォーカリストとしてもっと上を目指していくためには、本名の“松尾太陽”で活動したほうが誠意が伝わると思ったんです。なので、レコーディングでも超特急の作品ではなく、自分ひとりの作品というところでプレッシャーをかけてくれるような緊張感があって。自分の中で OK を出せない限りは終わらなかったし…もう、本当に時間の許す限り向き合いました。例えば、大塚 愛さんが提供してくださった１曲目の「mellow.P」は録り終わったものに違和感を感じて、再度録り直してみたりとか」

――違和感とは？

「ポップで可愛い曲なんで、最初はわりと明るめに歌ったんですよ。でも、録ったものを聴いてみたら、“あれ？　なんかちょっと変な感じがする”って。“合うはずだったんだけどな…”って、僕の中でまさかの見当違いみたいな感じになってしまったんです。後日、大塚さんから“タイトルの通りメロウな感覚で、もう少し浮遊感が欲しいかもしれないです”という言葉をいただいたのをもとに、もう一回レコーディングしてみて、こういうかたちになりました」

――“メロウなパーティー”という意味のタイトルですが、確かにパーティーよりもメロウに寄った歌い方ですよね。

「曲調と歌い方にギャップがあるという意味では、「Sorrow」と似たものがありますよね。曲がポップだからキュートにいくのかなと思ったら、そうでもなく。歌詞もよくよく見てみると、今の状況や現代に対して言ってるようなところがあるんですよ。主人公にちょっと浮世離れした感もあるんで、こっちのパターンで良かったと思います」

――ちなみに今回のソロデビューにあたり、超特急のメンバーからもらって一番嬉しかった言葉って何でした？

「一番となると…ソロデビューをするって発表した時かな？　SNS でカイが“誇らしい”って言ってくれたんですよ。それが僕の中では記憶に残ってます。あと、オフィシャル YouTube でカバー動画をアップしてるんで、タクヤはそれを観て連絡してきてくれたりもしますね。あいみょんさんの「裸の心」をカバーした時は、“好きな曲だから歌ってもらえたのが嬉しかった”とか、そういう感想を個人的にくれたりもします」

――自分のグループのヴォーカルがひとり立ちするのは、間違いなく誇らしいことですよ。

「でもね、そんなふうに言ってもらえることが、僕としてもすごく嬉しいんですけど、その言葉をいいプレッシャーとして、また自分にかけていきたいですね」

取材：清水素子

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『うたうたい』

Mini Album　9/2 Release
SDR
ZXRC-2069
¥2,530（税込）

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■「君こそスターだ」（'04）／サザンオールスターズ
「超特急のオーディションの際に歌った曲なんですよ。ただ、直接歌ったわけじゃなくて、当時は大阪に住んでいたから映像を送ったんです。カラオケボックスに固定カメラをセットして、特に曲指定はなかったからカラオケでよく歌ってた曲ということで選ばせてもらいました。確か“もう一回送ってください”って言われて送ったのが、この曲だったのかな？　いつもドライブとか行く時に車の中でかかってた…この世代の楽曲は親がめちゃくちゃ好きだったから、常に家でかかってて馴染み深かったんですよ」

MORISAKI WIN

無邪気に音楽がやれているし、純粋に楽しい

ソロアーティストとしてのキャリアを進み始めたMORISAKI WIN。彼の作り上げた1st EP『PARADE』は、グルーブ感あふれる楽曲が並ぶシティポップ・フレイバーな作品となった。ますます磨きのかかったヴォーカルが、新たなサウンドでフレッシュな輝きを放っている。

── PRIZMAX(以下、プリズ)が解散し、"MORISAKI WIN"として活動していくことになった時はどんな想いがありましたか？

「単純に怖かったです。ステージにひとりで立ったこともほぼないし、"録音はどういうスタイルでやるんだろう？"とかいろんなことが不安でした。しかも、解散ライヴを経て、すぐコロナ禍になってしまって。でも、あの自粛期間が切り替えの時間になったんです。何も活動ができない中で、ちゃんと覚悟ができたというか。これからも音楽を続けられる喜びって意味では、純粋に嬉しかったです」

── やはり音楽を続けたい気持ちは強かった？

「それは強かったです。昨年の末に僕らの中でプリズの解散が決まって、それを年明けに発表したんですけど、スタッフさんにどうにか音楽を続けられないかって相談してました。グループとして自分がやれることは全て出し切ったつもりだけど、ひとりとなると全然違うし…それこそミャンマーでソロとしての活動をスタートさせて、逆輸入というのも考えたんですよ。そしたら年明けに、今のレーベルから声がかかってるって話を聞いてびっくりしました。30歳になる男…それもすごい結果を残してるわけでもないのに、まさかレーベルが付くなんて。それは素直に嬉しかったですね。で、プリズが終わってから時間をかけてやろうとなってたんですけど、コロナの問題が起きて、オリンピックも延期になって。"じゃあ、せっかくだから30歳の誕生日(8月20日)に合わせてEPを出そう"って話になったんです」

── なりたいアーティスト像はありましたか？

「もちろん立ちたいステージとか、見たい景色はあります。昔から言ってるように、アジアツアーは絶対に達成したい。ただ、どういうアーティストになりたいかはまったく分かってなくて…僕自身、深く音楽を知ってるわけじゃないし。なので、いろいろ挑戦しながら勉強しつつやっていけばいいのかなって。例えば10年後に振り返った時、"あっ、俺はこういうアーティストになっていたんだ"って気づけばいいというか。でも、作品を届けて、作品で勝負したいって想いはあります。プリズで培ったことや、音楽に対する気持ちは1ミリも変わってないので。そこに新しいものが次々足されていってる感覚ですね」

── 応援してくれてた人の想いを背負っている自覚もありますか？

「それはもちろんあります」

── では、1st EP『PARADE』の制作はどのように進んだのでしょうか？

「まずどんな作品にするか選曲会をやったんです。コンペで集めたデモ音源を聴いて、純粋に"自分の好きなものは何か？"や"心踊るものは何か？"、"パフォーマンスしたいと思える曲はどれか？"って選曲をして。その段階では、海外でも通じるポピュラーなものにしようというのはありました」

── 大きな括りでは、ブラックミュージックがベースにあるシティポップという感じですね。

「はい。Jamiroquaiとかは聴いていたんですけど、それこそ「WonderLand」のようなアシッドジャズってジャンルは今までやったことなかったんですよ。でも、そういう曲を聴いて、パッと"これをやりたい！"って思ってる自分がいたんです。そこで新しい自分を知れました」

── 歌詞は全曲とも英語がメインというのは？

「それでも全然いいってスタッフさんが挑戦させてくれたんです。新しいチームでも、僕はスタッフさんに恵まれてると思いましたね」

── 自分のやりたいものが根本にあって新しいものにも反応していく、その最初の作品がこのEPってことですね。

「まさにそうです。考え込まずに"これいい！"ってやるみたいな(笑)。純粋に心から楽しんでできてることが幸せです」

── では、曲に触れていきましょう。ファンキーなアップチューン「WonderLand」が1曲目というのは？

「やったことがないジャンルだし、自分の喉の筋肉との戦いもあった曲で、結果的に1曲目になったんですけど、"ようこそMORISAKI WINのワンダーランドへ"って意味の曲になりました」

── 歌詞は作家さんと話したりしたんですか？

「作家さんといろいろ話して、僕を代弁してくれる歌詞を書いてくれたんです。好きなフレーズがあって…2番の《いつかのままのPrizm　ココロに抱いてTonight　あの日夢見たSky》ってところです」

── 意味深ですね。次のリード曲「パレード－PARADE」は先行配信シングルにもなった曲ですね。

「実は最初、リード曲は「WonderLand」だったんです。でも、コロナで世の中の状況がいろいろ変わってしまったし、MORISAKI WINが今のタイミングでデビューする意味を考えた時に、僕自身も"前に進んで行く"という想いが強いので、この曲に変えました。歌詞もレコーディング直前まで全然違ったんですよ。夏を感じさせるようなさわやかな歌詞だったけど、ガラッと変えました。女性を誘うようなフレーズもあるけど、"新世界の幕開けで俺もみんなも不安と恐怖があるだろうけど、それでも一緒に突き進んで行かないか？"って誘いなんです。今の世の中の情勢と僕のデビューもかけて、この曲がリードになりました」

── 「d.s.t.m.」はカッティングギターのディスコグルーブチューンですね。

「今ってイヤホンミュージックの時代だから、イヤホンでどう聴かせるかを考えてレコーディングしないといけないって言われたんです。そこを結構意識して歌った曲でもありますね。この曲に関しては、ほとんどヴォーカル1本なんですよ」

── 確かに。歌を重ねない生っぽさがあります。

「はい。生々しいグルーブ感で歌っていく挑戦的な楽曲でした」

── 切なく熱いメロディーが響くミッドチューン「Blind Mind」に関しては？

「これは逆に歌を6本重ねて、声の立体感を表現しました。ほんと歌うのが苦しくて…ライヴで一番難しいと思います。"Blind Mind"は"盲目"って意味で、"君にハマりすぎて他が見えなくなってしまう。この状況から出たい"って曲なんです。でも、それは過去の自分だったり、"自粛期間でどうすればいいんだ？"ってことからも抜け出したい、そういう気持ちの葛藤を歌ってます」

── なるほど。そして、最後のナンバーは明るさを感じる「What U Wanna Do？」。

「これもすごい曲で、J-POPと思いきやR&Bが来て急にミュージカル調になるっていう(笑)。作りながらそうなったんですよ。これ、フェイドアウトで終わるんですけど、ループして聴いてほしいって意味でそうしました。結果的にこの作品を通して言いたいのは、"僕と一緒に踊ろうよ"ってことですね」

── ソロとして1歩目となる作品を作っての今の感想はいかがですか？

「めちゃめちゃ自信があります。"僕、音楽をやってます！　これを聴いてください！"って超言える作品です。自分でも何度も聴いてますもん。無邪気に音楽がやれているし、純粋に楽しい。ずっと音楽に対してガチでぶつかってきたから、それが今につながってるんだなって思いますね。真面目にやるのが僕の強みなんで、これからも勘違いすることなく、ちゃんと作品を作り続けていきたいって改めて思ってます。あとは…やっぱりライヴがしたいですね」

── ライヴスタイルを確立するのは、これからの大きな課題ですね。

「はい。今はまだ生でひとりで歌うってことが掴めてないけど、掴んだらクソ強いってマジで思ってるんですよ。僕がライヴでどれだけ強いか、今までどんだけ乗り越えてきたかっていうのは胸を張って言えるんで。何を言われても、ライヴを観てくれたら全ての人を納得させるってくらいになりたいですね」

取材：土屋恵介

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『PARADE』

EP　8/19 Release
コロムビア
インターナショナル
COCB-54305
¥3,000(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■「Billionaire」('10)／トラヴィー・マッコイ feat. ブルーノ・マーズ
「この曲でブルーノ・マーズに出会って、僕のエンターテイナーとしての人生が変わったと言っても過言ではないです。ブルーノが"この人になりたい！"と思った初めてのアーティストなんですよ。歌い方を真似したりもしましたね。動画とかいろいろディグったのも初めてだし、ルーツも漁ったりして…もうただのファンです(笑)。ファンってなると、高校の時からコブクロが好きで…それきっかけでギターも始めたし、初めてMVを観て"うわっ！"ってなったのはマイケル・ジャクソンだったりするんですけど、中でもブルーノは特別な存在ですね」

むぎ(猫)×つじあやの

L→R　むぎ(猫)、つじあやの　photo by 飯島春子

涙腺崩壊必至！　最強ハートフルペアによる珠玉のコラボ曲

むぎ(猫)の最新作『窓辺の猫 e.p.』の表題曲は、なんと尊敬する大先輩・つじあやのとのコラボ曲！　木琴とウクレレの温かなコラボレーションに乗せ、親和性抜群の"一人と一匹"の歌声が描くのは、互いの名前も知らない少女と猫の、だからこそ切ない、宝物のようなストーリー。その制作秘話からお互いの超裏話まで、対談形式でお届けしよう。

――おふたりは事務所の先輩後輩の仲ということで、以前から顔見知りではいらっしゃるんですよね。

むぎ：実は昨日のMV撮影が顔合わせだったんで…今日が会って2日目です(笑)。

――ええ！　では、今回のコラボはいったいどういった経緯で？

むぎ：もともとすごく大先輩で、尊敬できる存在として意識はしていたんです。むぎはつじさんの「たんぽぽ」っていう曲が大好きで。それで、ある方に贈り物をするという番組に出演させていただいた時に、つじさんを選ばせていただいたんですよ。それをきっかけに"もっとお話ししたいな"とか、"曲を一緒に歌いたいな"って思うようになったんです。

つじ：私も同じ事務所に"むぎちゃん"っていう猫ちゃんがいるっていうのは聞いていて、"えっ、どんな猫なんだろう？"って。

むぎ：最初、ギャグだと思いませんでした？

つじ：いや、"面白いな！"と。周りにむぎちゃんを知っている人も何人かいたし、私は「るすばん天国」から入ったんですよ。あれ、MVにむぎちゃんは出てなかったですよね？

むぎ：そうそう。あれはアニメーションだったので。

つじ：曲と映像がすごく合っていて、面白い曲を作る方やなぁと思っていたんです。でも、実は恋を歌うような曲もあるって知って聴いてみたら、すごく胸がキュンとするような曲を歌っていらして。普通にポップスとして、すごくいいアーティストさんやなぁと思っていたので、コラボのオファーをいただいた時は嬉しかったです。

むぎ：うわぁ、嬉しい！　ただOKをいただいたあと、どんな曲にするかすごく悩んだんですよ。お互いそれぞれの役割を演じて歌い分けるっていうのは決めていた…まぁ、むぎは猫しか演じられないですけど(笑)。なので、飼い主と猫かなって。でも、それだと逆に引っかかりのない歌になるような気もしたので、お互い気にはなっているけれど、名前も知らない者同士の歌にしたんです。

――なるほど。窓辺の猫と、そこに通りかかる少女という。

むぎ：つじさんが歌っているので、この曲の中では少女だし、むぎも少女を思い浮かべて歌っていますけど、そのへんは聴き手の自由ですね。一人称は"私"なんで、少年が大人になって思い返している…ってふうに解釈してもいいし。この曲って別に恋愛ソングなわけでもなく、例えば"あの駄菓子屋のおいちゃん元気かな？"とか、そんなふうに"あの人はどうしているかな？"って急に思い出すような人って誰でもいるじゃないですか。そういう気持ちって、きっと胸の中に大事な思い出だとか宝物として残るから、その思い出の場面を歌にしようと思ったんです。

つじ：デモをいただいて、すごく可愛らしい曲やなぁって思いました。私が歌う女性のヴォーカルのパートも仮歌で入れてくださっていてね。

むぎ：あれ、むぎが歌ったものを加工したやつなんです(笑)。コロナ禍の中でのレコーディングだったから、制作は完全にリモートだったんですよ。デモと一緒に"こういうストーリーがあって、こういう曲です"っていう文章を、沖縄にいるむぎから東京にいるつじさんに送って。

つじ：そのデモの段階ですごく世界観があったので、歌に関しては本当にスッと入れました。お話の通り、窓辺に猫がいて、女の子が学校の帰りに会いに来るっていう。実際、そういうことってあるんですよね。いつもここに立っている犬がいて…とか。お互い知らない者同士なんだけれど、気になっている。でも、何もない。あれってほんと不思議ですよね。

むぎ：不思議ですよね。名も知らぬ人だけど気になるって、みんなあると思うんです。街角にある物でも人でも、自分だけが気に入っていたものとかも。

つじ：そうそう。今もいつも歩いている道の窓辺に猫がいたりするんですよ。それも大体5時半とか時間も決まっていて。そういう経験もあったから、歌に関しては"あっ、これこれ！"っていうものが自分の中で見えたので、その通りに歌ったって感じです。

――結果、出来上がった「窓辺の猫 feat. つじあやの」は本当に泣ける曲で！　7月に行なわれたむぎさんの配信ライヴ『むぎ(猫) Wonder Nyander Tour 2020 完結編～配信！そっちいかずねっこほる～』の最後にティザー映像がサプライズ披露された時も、"つじさんとの声の親和性はヤバい"というコメントがあったりして、まさにその通りだなと。

むぎ：つじさんとのコラボは初めてなので、やってみるまでお互いの声がどれくらい溶け合うのか、正直言って分からなかったんですよ。だけど、やってみたら、つじさんとむぎの声ってばっちり合うと、むぎも思いました(笑)。だから、コーラスワークも頑張ったので、つじさんとむぎの声の親和性も聴いてほしいところです。

つじ：私は《名前も知らないけれど》の部分のコーラスがすごく好きです。

むぎ：あのBメロのハモリのところね。

つじ：そうそう。あそこグッときますね！

――分かります！　つじさんのウクレレとむぎさんの木琴の組み合わせも絶妙で、温かい音色とメロディーに問答無用で涙が出ました。

つじ：ウクレレと木琴って両方とも木の楽器やし、合うんですよね。私も自分の曲をアレンジする時に木琴を使ったりもするんですけど、やっぱり馴染みがいい。

むぎ：そうですよね。ウクレレと木琴、馴染み良かったですよね。

――何より猫と少女の温かな心の交流の先に、ちゃんと別れが示唆されているところが、もう、泣けて仕方なかったです。

むぎ：むぎが歌を作る時に、いつも大事にしているのが"みんなの宝物を歌いたい"ってことなんです。今回もみんなの中でひとつの宝物になっているであろう思い出を膨らませて歌にしたので、逆に言えばこの曲を聴いて"今、出会っている何気ない人たちも大事なんじゃないか？　この気持ちも宝物になるんじゃないか？"って感じてくれたら、それはそれですごく嬉しいです。

つじ：名前は知らないけれど知っている、この道を歩けばいつも出会えるっていう存在って、別れが来た時に挨拶もできないじゃないですか。普通の友達やったら"じゃあ、ご飯でも食べに行こうね"とか別れの言葉も言えるけど、そういうのもなくて。何かあるとパッと会えなくなるのが切ない。この曲の少女だったら、たぶん大学に行くとか、引っ越しとかでしょうね。もう会えない、でも、心の中で思い出して…っていうところが、みんな切なく感じるところなのかなぁって思います。

――しかも《思い出が色あせて》というフレーズもあるってことは、その大事な思い出を忘れてしまうことも想定しているじゃないですか。

むぎ：あとで思い出すこともあれば、思い出さないこともあるんだろうなと。だから、思い出せば、その気持ちは宝物なんだけど、その宝物がどっかに消えていってしまうっていう、その切なさも風情だと思いますよ。

取材：清水素子

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『窓辺の猫 e.p.』／むぎ(猫)

EP　9/9 Release
SPEEDSTAR RECORDS
【初回盤】(CD)
VICL-65414
¥3,000(税抜)
※特殊パッケージ仕様
【通常盤】(CD)
VICL-65415
¥1,600(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■むぎ(猫)…「千年にひとり」('12)／原マスミ
「ライヴの登場SEにも使わせてもらっています。たまたま入ったお店のBGMで原マスミさんの曲がかかっていて、"えっ、何、この声！　この歌!!"と思って、マスターに誰の曲かを教えてもらい、すぐに音源を入手して大好きになった方なんですね。特に「千年にひとり」は可愛いラブソングだし、むぎ(猫)の世界観にもぴったりだと思っていて…むぎの声とマスミさんの声が似ているのもあって、よく自分で歌っていると思われるんですよ。"ライヴのSEになっているのは、むぎちゃんの何という曲ですか？"って。それぐらいむぎの世界観にマッチしているし、まさにライヴの登場SEにぴったりだなと。お店で聴いた曲はドロッとした全然違う曲だったんですけどね(笑)」

■つじあやの…「結婚しようよ」('72)／よしだたくろう
「高校2年の文化祭で吉田拓郎さんの「結婚しようよ」をアカペラで歌ったのが思い出深いですね。まだウクレレは弾けなかったので、手拍子だけで歌いました(笑)。そもそも拓郎さんの曲を弾き語りしたくて、それがきっかけでウクレレをやるようになったんで、拓郎さんが私のルーツなんですよ。当時、烏龍茶のCMで「結婚しようよ」を女性シンガーの方が中国語でカバーされていて、"この曲いいな～。吉田拓郎っていう人が歌ってはる曲なんや"と思ってレンタルして、そこからハマっていきました」

尾崎由香×コレサワ

正反対のふたりだからこそ生まれたラブソング

声優として活躍する尾崎由香と、シンガーソングライターのコレサワ。タイプの違うふたりが尾崎の新作ミニアルバム『NiNa』の収録曲「デートに誘うの」でコラボした。お互いの魅力を引き出し合ったとても素敵な楽曲に仕上がっている。同曲が誕生した経緯から、ふたりの恋愛観などをじっくりと話してもらった。

――尾崎さんのミニアルバム『NiNa』の収録曲「デートに誘うの」は、コレサワさんが楽曲提供をしていますよね。すごく意外な組み合わせだったんですが、今回のコラボはどのような経緯で実現したのでしょうか？

尾崎：私がコレサワさんの大ファンだったんです。よくカラオケでも歌っていましたし、ソロライヴの時はコレサワさんの衣装を参考にさせていただいたんですよ。それくらい好きだったので、ダメ元で楽曲をお願いできないか訊いてみたんです。そしたら快諾していただいて、この奇跡が起きました！　決まった時は夢のようでしたね。

コレサワ：そう言ってもらえてすごく嬉しいです。以前からファンでいてくださったことはスタッフさんから聞いていたんですが、まず楽曲提供をする際は、その方の声を聴いて、ちゃんと愛を持ってできるかできないかを判断させていただいているんです。そこで本当に可愛い声だったので、私の曲に合うかもしれないと思い、“ぜひお願いします”と答えたんです。

――もともと尾崎さんはコレサワさんのどういうところが好きだったのでしょうか？

尾崎：とにかく憧れるんです。歌詞も共感しますし、中でも「SSW」（2017年8月発表のアルバム『コレカラー』収録曲）という曲が大好きなんですよ。好きな人にフラれている立場なのに強く生きている女子を描いていて、とてもいいなと思ったんです。私もこんなふうに強く生きたいと思い、背中を押してもらえた気がしたんですよね。そういう歌がコレサワさんの中にはたくさんあって、すごく好きで聴いています。

コレサワ：いや～、照れます（笑）。こんなことを直接言われることがなかなかないので、今のこの瞬間を大事にします！（胸に手を当てる）

全員：あははは。

――この曲はどのように作られたのでしょうか？

コレサワ：楽曲を作る時は提供させていただく方とまず会うことにしているんですが、今回も会わせていただいた時、LINEを交換したんです。そこで恋愛観を訊いて、考え方などを教えてもらった上で歌詞を書きました。

尾崎：その会話があったからこそ、この歌詞になっていると思うんですよ。最初に歌詞をもらった時、すごく自分らしさを感じたので感動しました。

コレサワ：良かった！　話していると尾崎ちゃんは恋愛に対して奥手なことが伝わってきたんです。中でも、恋愛に対して積極的になれないという話をしてもらった時に、それなら曲の中では積極的になってもらいたいって思ったんですよ。それに、いつか王子様が現れた時に、ちゃんと積極的になれたらいいなという私の妄想や願いも入りつつ、この歌声でこの主人公を歌ってもらったら合うと思って作りました。

尾崎：実際に歌ってみたら楽しくて！　レコーディングではコレサワさんにディレクションをしていただいたのですが、その時はちょっと緊張しました。

コレサワ：私は自分が歌わないからこそ、“ディレクションってこんなにいい気分なんだ”って思いました（笑）

――ディレクションすることでどのようなことを感じましたか？

コレサワ：声が通るんですよ。声優さんをやられていることもあって、パーン！と高音を当てるのはすごいと思いました。普段の話し方からも息が通っている感じがあって、“すごいな！　いいな～”と思いながら聴いていました。Bメロの表情がちょっと変わるところもいい感じに歌ってくれて、本当に満足しています。

尾崎：安心しました。私は歌ってみて、こうやってリズムを取るんだということに気づいたんです。それが何かに染まっていく感じがして楽しかったですね。もちろん難しさもあるんですけど、やるたびに染まっていくので、その感覚が新鮮でした。

コレサワ：自分で作っていて、“難しいだろうな”というところもあったんですが、“それは乗り越えてくれるだろう”という確信があったんです。その期待を込めて作ったんですが、見事に乗り越えてくれたので感動しました。

――この曲の主人公に対してどんなことを感じましたか？

尾崎：自分に近いんですよ。言いたいことが言えないけど、でも言いたいって思っていて…。頭で考えてしまうタイプでもあるので、そこが歌詞に投影されていて、この曲の主人公と気持ちが通じ合う感覚がありました。

――先ほどコレサワさんがこの曲を聴いて“ぜひ積極的になってほしい”と言っていましたがいかがですか？

尾崎：確かに、この曲を聴くとちゃんと気持ちを伝えないとダメだなって思いますね。何か言えない自分がいるからこそ成長しようと思えますし、仕事の前に“これは言わなくちゃ”と思った時に聴くようにしています（笑）。

――すでに応援歌になっているんですね。

尾崎：はい！　“デートに誘うの”というタイトルになっていますが、いろんな場所で私の背中を押してくれる曲になっています。

コレサワ：それは良かった！

――ちなみに完成した曲を聴いてみていかがでしたか？

コレサワ：可愛らしさが違うんですよ！　私ならもっと癖を強くしてしまいそうなんですが、尾崎ちゃんが滑らかに歌ってくれた部分があったので勉強になりました。“こういうアプローチの仕方があるんだ!?”って感動したんです。

――新たな発見があったんですね。

コレサワ：そうですね。曲調は私の「SSW」という曲が好きだと聞いていたので、そのイメージに合わせたんですが、自分的には作ったことのない主人公の楽曲になったんじゃないかと思っています。作っていてとても楽しかったですね。

――さて、今作が収録されたミニアルバム『NiNa』はどのような作品になっているのでしょうか？

尾崎：今回のタイトルになってる“NiNa”はスペイン語で“女の子”という意味なんです。さらに、27歳である私の等身大の女性の気持ちが本当に色濃く収録されているので、今作をきっかけに成長できたらいいなという想いが詰まっているんです。ぜひ共感してもらえたら嬉しいですね。

取材：吉田可奈

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『NiNa』／尾崎由香

Mini Album　8/26 Release
WARNER MUSIC JAPAN
【初回限定盤】（CD+DVD）
WPZL-31740～1
¥4,000（税抜）

【通常盤】（CD）
WPCL-13197
¥2,500（税抜）

コレサワ：大阪府摂津市出身のシンガーソングライター。2017年8月に1stフルアルバム『コレカラー』でメジャーデビュー。18年には2ndアルバム『コレでしょ』、20年1月にミニアルバム『失恋スクラップ』をリリースし、8月に1stシングル『憂鬱も愛して』を発売。中毒性のある声、ポップなメロディー、日常の風景を独自の視点で切り取った歌詞で同世代の女性を中心に支持されている。メディアには顔出しはせず、素顔が見れるのはライヴのみで、“れ子ちゃん”と言われるクマのキャラクターがビジュアルを担当する。

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■尾崎由香…「カブトムシ」（'99）／aiko
「昔からよく歌っている一曲ですね。カラオケで“何か歌って”って言われたら一番に歌います。初めて生誕祭をした時にもカバーさせていただいていたので、夏になると歌いたくなるし、大事な時には毎回歌う曲だと思っています。学生の頃から変わらない大切な一曲です」

■コレサワ…「Good-bye days」（'06）／YUI
「高校時代は軽音楽部に入っていて、初めて組んだバンドでコピーした曲ですね。私は弾き語りで練習してた曲なんで中学校の時から歌っていたんですが、文化祭のライヴで楽曲を完璧にコピーしたくて、楽器未経験者だったメンバーにスパルタで楽器の教育をしたんですよ（笑）。そしたらメンバーが病みそうになりながら練習していて。その風景が今でも思い浮かんでくるんですよね。そんな思い出深い曲です（笑）」

SIZUKU with MAZAKI

GOD プロデュースの SIZUKU with MAZAKI が『第二回 世界環境サミット』のテーマソングを担当

来る 8 月 27 日～ 29 日に開催される『第二回　世界環境サミット』のテーマ曲「愛するプレアデス」を歌唱する SIZUKU　with　MAZAKI。作詞作曲＆プロデュースを GOD が担う同曲は、ディズニー映画『アラジン』の主題歌「ホール・ニュー・ワールド」を感じさせる一曲だ。対話的な男女の歌声が共創し昇華されていくスケール感あふれる「愛するプレアデス」の内容とストーリーは、まさに今回のテーマに同調している。

L → R　MAZAKI(Vo)、GOD(Pro)、SIZUKU(Vo)　photo by MANA

── まずは各位の自己紹介的な面からおうかがいします。MAZAKI さんは現在 GOD さんのもとで俳優業や歌をなさってますが、もともと裏方をされていたところを GOD さんに声をかけられたそうですね。

MAZAKI：もともとはバンド系のシンガーに憧れていました。なので、裏方を手伝いながらも表舞台でもやってみたい気持ちは常々あって。そんな折に GOD から"歌をやってみないか？"と誘われたのがきっかけでした。

GOD：当初、彼を裏方に引き入れたのは彼の女性の友人の多さも狙いでした（笑）。彼がいれば女の子からの人気も増えるんじゃないかと。そんなある時、カラオケに一緒に行ったんですが、そこで彼の歌声を聴いたら"これ、ロックでいけるじゃん！"とひらめいて。そこからいろいろと展望が膨らんで今に至る感じですね。

── SIZUKU さんも GOD さんのプロデュースでずっと歌を歌ってきていますよね？

SIZUKU：はい。幼い頃から歌うことが好きで、声楽家を目指して音大まで行ったんですが、そこからの就職先がなかなかなくて。アルバイト先で歌っていたところを GOD に声をかけてもらったんです。私、出身が兵庫県の伊丹市なので、当初は関西を中心に歌やラジオ等を一緒にやらせてもらっていました。その後、活動の拠点を東京に移し、メジャーでシングルを出したんですね。その際に環境工学の博士から"シータ波を持った稀にみる歌声だ"との評価を受けまして。そこから社会貢献も意識しながらの歌手活動にシフトし始めました。

── 対して、MAZAKI さんや SIZUKU さんから見た GOD プロデューサーはどのような人物ですか？

SIZUKU：ひと言で言うと宇宙人です（笑）。一般の方とは感性がまったく違っていて、同じものを見たとしても他の方と観点が違うんです。楽曲制作に関しても、歌詞とメロディーが一緒に降りてくるらしく…普通はどちらかが先に浮かび、それを膨らませていくじゃないですか。でも、それがどうも一度にスッと降りてくるそうです。しかも、楽器もできないし、楽譜も読めないのにですよ！　ほんとすごいなって。

GOD：楽曲制作に関してはある種の鍛錬を経てきましたから（笑）。というのも、ゴーストライターを長年やっておりまして、一日 6 曲というノルマをこなしていた時期もあったんです。なので、テーマやモチーフがあれば、そこからパッと何かが浮かんできたり、降りてきたりするんです。

── では、MAZAKI さんから見た GOD さんは？

MAZAKI：その創作能力もですが、関わる仕事のスケール感に驚きますね。ある日、"今度こんなプロジェクトをやるから"と突然と伝えられるんですが、それがかなりの規模だったりしますから。まったく想像がつかないです。

── そして、今回は『第二回　世界環境サミット』のテーマ曲として GOD さんが作詞＆作曲とプロデュースを担当し、西澤正明さんが編曲した「愛するプレアデス」を、SIZUKU さんと MAZAKI さんがデュエットされるという。

MAZAKI：歌手として光栄に思います。私自身、社会貢献にも非常に興味があった中でのお話しだったので、とても嬉しく思いました。

SIZUKU：私も大変ありがたいと思うのと同時に、自分の声が社会貢献に役立てることが嬉しいです。"シータ波シンガー"として GOD をはじめ、周りの方々から"空気を浄化できる声"と称してもらっているので、そういった部分では環境サミットで私が歌うことの意味合いも感じていて。この歌を通してみなさんがいろいろな考え方をし、何かが変わってくれるかもしれない…そんなきっかけや機会になるかもしれない場に関われるのはとても光栄です。

── GOD さん的に、このふたりの組み合わせにしようと思い至った理由というのは？

GOD：いい質問ですね（笑）。もともと今回の曲は"Clear Of The Earth"というタイトルで SIZUKU がひとりで歌う想定だったんです。"地球を清掃化、浄化する"みたいなイメージで挑んでいたんですが、意味的に"宇宙消滅"にとらえられる懸念があるとの助言があり、それはマズいと（笑）。そんな中、先にタイトルの"愛するプレアデス"が降りてきたんです。と同時にディズニー映画『アラジン』主題歌の「ホール・ニュー・ワールド」のイメージも降りてきて。で、"これは男女ふたりのデュエットでいくべきだ！"と。なので、MAZAKI には普段のロック調の歌唱ではなく、あえてスイートな歌声に挑戦してもらいました。

── 分かります。この「愛するプレアデス」の男女の想いが、対話的な歌唱ながらも絡み合い昇華していくさまは「ホール・ニュー・ワールド」と重なります。

GOD：そうなんです。男女が出会い、手を取り合って、互いのパワーを絡み合わせてさらなる高みへと昇っていく…この歌にはそのようなイメージがありました。

SIZUKU：覚えやすい歌でもあるので、たくさんの方に聴いてもらい、ぜひご自身でも歌ってもらいたいです。もちろん歌詞に込められた気持ちや意味も考えてもらいながら。それが私たちなりの社会貢献になればなと。

GOD：SIZUKU のシーター波の歌声に MAZAKI の甘い歌声が絡み合うことで宇宙までこの歌声が届き、宇宙をも浄化させられたらと思っています！

── そんな「愛するプレアデス」をどのように聴く方々に受け止めてほしいですか？

MAZAKI：愛のパワーをみなさんに届けたいです。さまざまな幅広い層の方に聴いていただけるチャンスでもあるので。

GOD：ふたりのハーモニーで地球や宇宙をはじめ、多くの方の浄化の手助けになれたらなと思いますね。

SIZUKU：私的には環境とかごみ問題に興味がない方にも聴いてもらいたいです。そこで何かの気づきや何か運動を始める後押しができたら嬉しいですね。音楽ってそうやって聴いた方それぞれが自分なりに受け取り、解釈をして自分を重ねて考える…そんな要素を持っていると思うんです。それは各人違ったもので全然構わないんですが、聴いた方々が自分なりの発見や気づき、そこで何をすべきかを考えるきっかけになってくれたら嬉しいです。

取材：池田スカオ和宏

『世界環境サミット in SDGs Virtual City』公式サイト▶

okmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『世界環境サミット in SDGs Virtual City』
SDGs（地球環境を守り、公平で持続可能な社会を築くために、2030 年までに世界が協力して達成する国際目標）的な取り組みをしている世界中の企業や団体に対して、世界規模でのマッチングや後押しをするためのオンラインプレゼンテーションの場。第一回目は 2020 年 4 月 29 日～ 5 月 1 日の 3 日間の日程で開催。

第二回 開催予定日：
8/27(木)～29(土)10:00～18:00(JST)
視聴料金：無料
※詳細については公式サイトを参照

■会長：平井正昭 コメント

「循環型の社会をテーマにした SDGs の活性を目指しています。今、このコロナ禍で世界が静まり返っている中、じっとしているのではなく、今の法を破ることなく動いていく。それがすごく大事だと考えています。経済を止まらせるのではなく、オンラインでできる最大限を駆使し、どの国の人たちでも自分の母国語で理解できる。そこが第一回目で実現できたので、それを経た第二回目は"バーチャルとリアル"をテーマにオンラインからのリアルに向けての接点を目指し、それらを世界に向けさらに発信していく所存です」

■総合プロデューサー：八重樫恵介 コメント

「第一回目のテーマは"緊急避難"でした。コロナ禍にむいてじっとしているだけでなく、何か一歩踏み出そうとの主旨がありました。第二回目の今回は、その緊急避難後の未来に向けたサミットにしようとテーマも"希望とビジョン"にしています。今回は企業だけではなく、学生にも参加いただき、大人もですが、これからの世代にもぜひこの SDGs への興味を持っていただきたく考えております。他にも参加企業様の技術、例えば最新 VR 等の導入など、さらなる未来を作っていくことも盛り込み、世界に向け発信いたします」

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■ SIZUKU…「TOMORROW」('95)／岡本真夜
「今の活動をする前は歌が歌えるお店でアルバイトしていたんですけど、そこのお客さんとして GOD が来たんですね。その時に"一番好きな曲を歌ってみて"って言われて、この曲を歌ったらスカウトされたんです。なので、今ここにいられているのは、この曲のおかげだと思ってます」

■ MAZAKI…「徳川姫殿音頭」('19)／徳川静華と徳川姫殿劇団
「人生の中で一番嬉しかったことということで、メジャーデビューした「徳川姫殿音頭」です。"徳川静華と徳川姫殿劇団"というユニットを組んで、"徳川竹千代"名義でメインヴォーカルをやらせてもらったんです。CD が出た時は嬉しかったですね。自分の CD がお店に並んでいるのを見て興奮しました」

■ GOD…「The Omen」('76)／ジェリー・ゴールドスミス
「映画『オーメン』の音楽なんですけど、初めて聴いた時に"これは何だ!?　こういう音楽がこの世にあるのか！"と衝撃を受けて、自分もそういう音楽を作りたいと思ったんです。映画における音楽の重要性を知りましたね。まだ、恐怖映画の音楽は作ったことはないんですけど（笑）」

イナズマロック フェス 史上初

オンラインで開催決定！

サブスクLIVE

INAZUMA ROCK FES. 2020

2020.9.19 SAT

詳細は近日発表！ https://inazumarock.com/

ライブ配信サブスクリプションサービスのプラットフォーム「サブスクLIVE」は、7月にLINE LIVEプレミアムチャンネルでサービスを開始しました。
月会費は580円（税込）で、会費収益は「Save the Live Project」に賛同する加盟ライブハウスに分配することでライブハウスの存続を支援します。
「イナズマロック フェス 2020」は、「サブスクLIVE」に月額有料会員登録すると閲覧できます。

Discover What's New!

音楽の魅力を伝える音楽専門サイト
BARKS
https://www.barks.jp/

さまざまなアーティストの最新情報を集約
okmusic
https://okmusic.jp/

歌謡曲・演歌に特化したエンタメ情報サイト
全日本歌謡情報センター
https://www.kayou-center.jp/

女性アイドル専門メディア
Pop 'n' Roll
https://popnroll.tv/

JAPAN MUSIC NETWORK

Pop’n’Roll

https://popnroll.tv/

26時のマスカレイド
江嶋綾恵梨

BARKSが運営するアイドルメディア『Pop'n'Roll』の江嶋綾恵梨（26時のマスカレイド）インタビューのアウトテイクカット。Pop’n’Rollでは、今年1月9日よりアイドル活動10年目を迎えている江嶋のアイドル人生を振り返る特集を実施。全6回のインタビューで、幼少期からアイドルになったきっかけ、地元福岡での活動、そして26時のマスカレイドとしての歩みに深く迫る。

MUSIC SUPPORTERS

インディーズシーンを引っ張るアーティストの情報を、インタビューで紹介していきます。
music UP'sのWebでは、インタビューの拡大版や過去の記事がまとめてご覧いただけます。
『MUSIC SUPPORTERS』で、あなたの運命のアーティストを見つけよう！

取材：千々和香苗

『MUSIC SUPPORTERS』
https://okmusic.jp/ups/music_supporters

カネヨリマサル

Mini Album　8/26 Release
『心は洗濯機のなか』
D.T.O.30.
DTOT-1004
￥1,600(税抜)

上段から時計回り、ちとせみな(Vo&Gu)、
いしはらめい(Ba&Cho)、もりもとさな(Dr&Cho)

カネヨリマサル：2014年に結成された、大阪を拠点に活動するガールズ3ピースロックバンド。バンド名はカネヨリ(姓)マサル(名)という架空の人物の名前が思い浮かんだことが由来する。19年4月よりビクターエンタテインメント『Getting Better Records』と『TRUST RECORDS』による共同インディーズレーベル『D.T.O.30.』(DON' T TRUST OVER 30.)の第一弾アーティストとして所属。同年10月に1stミニアルバム『かけがえなくなりたい』をリリースした。 http://kaneyorimasaru.com/

ありのままを表現することが自分たちの心を救うことにもなる

2019年10月に1stミニアルバム『かけがえなくなりたい』をリリースしたカネヨリマサル。バンドの集大成を詰め込んだ前作を経て完成させた2ndミニアルバム『心は洗濯機のなか』では、ひたむきな気持ちで純粋に音楽を楽しんでいる今の彼女たちが詰め込まれている。

「私は2年前にドラマーとして加入したので、前作は個人的に“私以外のふたりが積み上げてきたカネヨリマサル”という一面も意識していて、長丁場のレコーディングも初めてでしたし、すごく必死で無我夢中だったんです。今作ではそこからパワーアップしたものを感じ取ってもらえるんじゃないかと思っています」(もりもと)

「今の自分たちをどう表現するかってことをメンバーと話し合って作ったので、ポジティブな一枚になった手応えは感じていますね」(いしはら)

「今回の7曲を並べた時に“幸せな自分”よりも“報われない自分”という印象を強く感じたんです。まだまだ頑張っていかないといけないというありのままの姿を表現することが自分たちの心を救うことにもなるから、“心を洗う”っていう比喩表現をしたタイトルを付けました」(ちとせ)

1曲目の「シリウス」は不安で何かにすがりつくような印象があるが、後半にかけて負けずに進んでいく姿勢が感じられた。

「夢や目標を見つけた時って不安な気持ちにもなるけど、その目標にしがみついてでも絶対に離さないって想いは自分の中にあります。自分を奮い立たせるためにも、素直に大好きだと思える音楽を作っているので、極端に言ったら“いいと思ってもらえないならそれでいい”っていう気持ちも多少あって。だから、最後は強気な感じも出ているんじゃないかと思いますね」(ちとせ)

また、「ガールズユースとディサポイントメント」の《オレンジ色のステージの上　14歳の部屋のようだ》というフレーズには、作詞作曲をしているちとせにとっての青春が描かれており、衝動的なサウンドも印象的だ。

「この歌詞で描いているのは自分の部屋なんです。14歳の時の自分は救いようがないくらい…でも、最高にいい意味で蒼かったと思っていて、その蒼さを忘れたくないがために歌詞に入れたっていうのもあります。14歳の頃に大好きなバンドの曲を聴きながら寝っ転がって、夕陽に染められた部屋の中でエアギターをしてた思い出があって。その時はギターが弾けなかったけど、“絶対にバンドを組んでこんなギターを弾くんだ”って想像しながらカッティングをしてたんですよ(笑)。そんな私にとっての青春を表現しています」(ちとせ)

「疾走感があって、初めて聴いた時は“この曲いい！”って、すぐさま思ったんです。個人的に《オレンジ色のステージの上》というフレーズには、前作に収録された「もしも」のような夕陽と私たち3人がいるイメージもあって。そんな私にとっての青春を想像しながら、荒々しさや勢いのある感じも出そうと意識してます」(もりもと)

アルバムを締め括るのは、バンドの結成当初からあった「まだ」。もともとは弾き語りで披露していた曲で、他の曲に比べると尺が短いが、あえてそのままのかたちで収録している。

「バンドでやるってなってもかたちを変えたくなかったし、作った当時のままの気持ちで歌うために尺を伸ばすことはしなかったです。それもあってか、実際に歌ってみても過去の曲だっていうギャップはなくて、今の私を歌っていると思いました。昔から季節が変わると心が痛んだり、時間が過ぎていくのを実感すると心が揺らいで不安定になるんですけど、そんな自分に対して“揺らいでもいいんだよ”って思いながら過ごしていて。そうやって自分自身を保っているのは今も変わってなかったんやなと改めて感じた曲です」(ちとせ)

「「まだ」を初めて聴いた時、私はバンドに加入して間もなくて。いろんな人と新しく関わる中で悔しいこともあったんですけど、そんな時に“大丈夫！”と自信を持てた曲で、そんな私の気持ちも「まだ」の歌詞に入っていると思いました」(もりもと)

「ガールズユースとディサポイントメント」で歌っている《わたしの愛が正しくなるまでは　歌っている》や「ラクダ」の《あの人は聴かない歌　わたし歌いたいな》というフレーズからは、例え自分の音楽が思うように届かなかったとしても歌い続けていくという姿勢が受け取れた。それはちとせ個人として持っている想いではなく、バンドをする上でメンバー 3人に共通してあるものだ。

「私は自分ではあまり言葉にできていないけど、ちとせの歌詞を聴いて感化されたり、共感ができるからこそカネヨリマサルの曲が好きっていうのもあるんです。みんなで作った曲を聴いている時が一番幸せやなって思うので、当たり前じゃないけど、これからも当たり前のようにバンドができたらいいなって思います」(いしはら)

「メンバーのふたりは一緒に過ごしている時間も長いし、バンドだけじゃない面でも私のことを知ってるから、無意識に私の気持ちを感じてくれている、分かってくれていると思うんですよ。だから、私だけがひとりで突っ走っているって感覚はまったくなくて、ふたりも同じように自分の気持ちを引き連れてバンドをやってくれていると思っています」(ちとせ)

さとうもか

Album　8/5 Release
『GLINTS』
ANTHOLOGY
ANCP-006
￥3,000(税込)

さとうもか：1994年生まれ、岡山県出身在住。3歳からピアノを始め、初めての発表会で弾いた「ガラスの靴」という曲の最初の“シ・ド・ミ”の和音で音楽が好きになる。高校音楽科卒業後は音楽短期大学へ入学し、ガットギターやピアノの弾き語りを始めた。2018年3月に1stアルバム『Lukuwarm』をリリースし、19年5月には2ndアルバム『Merry go round』、20年1月に1stシングル「melt bitter」を発表。
https://satomoka.work/

ほとんどの作品が“一瞬と一生”からインスパイアされたもの

3rdアルバム『GLINTS』には、“女の子の恋にまつわる夏の物語”をテーマに掲げた全10曲が収録されている。儚くて切ない恋心や、何かが始まりそうなウキウキ感、将来への漠然とした不安など、10人の主人公を立てて短編集的に制作されており、各曲で描かれた主人公が懐かしくも、愛おしく感じる一枚だ。1曲目の「Glints」から高揚感のあるサウンドに誘い出されるが、TENDREが手がけたアレンジはちょっとしたミラクルがきっかけで完成したという。

「TENDREさんとは電話やメールでやりとりしながら、少し大人っぽい雰囲気のデモと明るいさわやかな雰囲気のデモの2種類を作ってもらったんですが、それをちょっとした遊び心で同時再生してみたら魔法のようにぴったりハマったんです！　そこからTENDREさんがオケをさらにブラッシュアップしてくださって、最後に私がコーラスを入れて完成しました。普通ならまったく違うアレンジを同時に再生したら大変なことになると思うのですが、「Glints」ではTENDREさんの作る音の緻密さと繊細さに改めて気づかされ、感動と衝撃が走りました！」

歌詞には“一瞬と一生”という裏テーマも。

「私はどんなことでも最初に終わりを想像するんです。多分“終わり”ってものが苦手なんだと思うんですけど、お休みも、旅行も、学生時代も、恋も、一瞬のキラキラには必ず終わりがくるし、忘れたくないと思っていてもはっきり思い出せなくなることがあります。すごく悲しいけど、それは消えてなくなったのではなく、染み込んで私自身になったんだと思えた出来事があって。その時に“一瞬って一生ものなのかもしれない”と気づいたんです。だから、全ての気持ちを引っくるめて今を生きていたいという想いを込めました」

さとう曰く、この裏テーマは「Glints」だけに限らず、彼女が作ってきたほとんどの作品が“一瞬と一生”からインスパイアされたものだと語る。「melt summer」や「ケイトウ」(2019年3月発表のアルバム『Merry go round』収録曲)にもその色が濃く出ているので、過去にリリースされた楽曲を改めて聴いてみると、また新たな発見があるかもしれない。また、今作では80 ～ 90年代の魔法系アニメの主題歌をイメージした「パーマネント・マジック」や、2000年代前半のアニメのOPソングをイメージした「オレンジ」、架空の野球チームへの応援ソング「Strawberry Milk Ships」など、アルバム全体のテーマとは別にユニークな発想力も楽しめる。各曲でやってみたかったことにチャレンジしている印象があり、中でも複雑な恋心が描かれたロックバラード「愛ゆえに」では初めてエレキギターを使用したそうだ。

「「愛ゆえに」をきっかけにエレキギターにハマってからは、初めてギターを手に入れた中学時代みたいな気持ちで音楽に取り組めていて、毎日が楽しすぎます！　最初は弾き語りが合うと思っていたのですが、歌詞を最後まで書き上げた瞬間に“これは絶対にロックや！”という気持ちになって。この主人公はつらくて涙が出てしまっても、ちゃんと前に進もうと決意した、弱いけどすごく強い女の子なんです。弾き語りで静かに過去を振り返るような、余裕のある心情ではないと思ってバンドサウンドにしました。もともとギターソロはバンドメンバーに弾いてもらおうと思っていたのですが、私が弾いたデモのテイクをなぜかみんなが褒めてくれて、そのまま使うことになったんです。上手すぎない不器用な感じがリアルで、この主人公にも合っていたのかもしれません(笑)」

また、さとうには“同じタイプの曲を作りたくない”という気持ちがあり、「My friend」ではヒップホップ感のある抑揚の付け方が印象的だったり、タイトル通りラテン系のリズムを楽しむことができる「アイスのマンボ」も新鮮だった。10曲にジャンルの統一感がないことで曲順にはかなり悩んだそうだが、実体験をもとに作った「ラムネにシガレット」がアルバムの最後を締め括る。

「私が学生時代に仲の良かった人と車でコンビニに行った時に、その人が飲み終わったラムネの瓶に入ってるビー玉を私にくれて、それがすごく嬉しかったんです。でも、その人は空いた瓶をすぐに灰皿にしていて、ビー玉なんかで喜ぶ自分が子供っぽく思えてなんとも言えない気持ちになって。ビー玉のきれいな水色と煙ったいタバコが対照的で、印象に残っている出来事です。曲順も迷ったんですけど、直感でこの曲を最後にして、1曲目の「Glints」では《永遠に夏してたい》と歌っているにもかかわらず、最後の「ラムネにシガレット」では《夏なんてつまらない》と歌っている矛盾した部分も気に入っています」

最後にアルバム『GLINTS』は彼女にとってどんな一枚になったのかを尋ねた。

「自分のやりたかったことが今までの作品以上に出せた気がしてとても嬉しいです。本当の感情を何度も噛み砕き、練り直して作ったので、私の中では全て大切な宝物になりました。一緒に作ってくれたアーティストのみなさんには本当に感謝の気持ちでいっぱいで、この作品がたくさんの人たちに届いてくれるといいなと思います」

Key Person

File 7,
スターダスト☆レビュー
根本 要(Vo&Gu)

クラプトンの生き様こそがブルースであり、僕の好きな音楽

J-ROCK & POP の礎を築き、今なおシーンを牽引し続けているアーティストにスポットを当てる企画『Key Person』。第 7 回目となる今回は、スターダスト☆レビューのリーダーである根本 要(Vo&Gu)に語ってもらった。

音楽は仏頂面で歌っても何も伝わらない

――スターダスト☆レビュー(以下、スタレビ)は 1979 年に『第18回ヤマハポピュラーソングコンテスト』に出場し、「おらが鎮守の村祭り」で優秀曲賞を受賞。その後 81 年にデビューされましたが、コンテストに出る前はどんな活動をされていたのですか？

「僕は埼玉県の行田市出身なんだけど、隣の熊谷市ではすごく音楽が盛んだったんですよ。その中に“木偶(でく)”という音楽サークルもあって、僕はたまたまその方たちと仲良くさせていただいてて、いろんな音楽を学ばせてもらいました。そのサークルは街で一番大きな八木橋デパートの地下を改造してライヴハウスもやってたので、僕も高校生の時からたくさんライヴをやらせてもらってたんです。練習スタジオとしても使わせてもらったんだけど、そこでは先輩たちの楽器も使わせてくれたし、その先輩方がまたサザンロックとかブルースロック、ラテンロックとか渋い音楽ばっかりやってたんですよ。そんな人たちに鍛えられて、育ててもらいました。僕らがプロになれたのはその人たちのおかげです。その後もライヴを続けていくうちに楽器屋さんから“お前たちコンテストに出てみなよ”って声をかけられて…それがヤマハのコンテストだったんです。でも、僕たちはコンテストを嫌がってたんですよ」

――それはどうしてですか？

「コンテストって演奏できても 1、2 曲じゃないですか。そんなもんでは何も分からないだろうと。それまでも小さなコンテストに何度か出て優勝したこともあったし、“やっぱり僕らはライヴだな”ってことで、渋谷の屋根裏や道玄坂にあったヤマハ、それと大阪の小さなライヴハウスでやってました。それがディレクターさんの目に留まった…当時のアマチュアならみんなそういう流れでしょうね。今みたいにネットを使って音楽を聴いてもらうなんてことはなかったから」

――スタレビはロックバンドですが、親しみやすさも特徴のひとつにあって、私はロックバンドと親しみやすさってあまりセットにならないイメージがあったので驚いたのですが、このように愛されるようになっていった背景にはどんな考えがあるのでしょうか？

「僕らは音楽好きの普通のアマチュアバンドが、運が良くてこんなふうになっちゃったって思ってるから、いわゆるロックバンドのイメージのような“俺は我が道を行くぜ！　お前らついて来いよ！”っていう絶対的な自信に欠けてるんだろうね(笑)。これは僕個人の考え方だけど、音楽は人を楽しくしてくれるものだから、仏頂面で歌っても何も伝わらないっていうのが、ライヴをやる上での根底にあるんだ。一緒に楽しみたいし、僕が歌ってお客さんがただ拍手をするってだけだったらこんなにライヴはやってないと思うわけ。僕が歌って、お客さんも歌う。お客さんが拍手してくれて、僕たちもお客さんに拍手する。その関係がいつの間にかスタレビというバンドのライヴを作ったんだ思う。でも、最初からそうしようと思っていたわけではないよ。ヒット曲も出ず、それでもライヴをやればお客さんがだんだん集まってくれて、自然と出来上がっちゃったもんだから、もしヒット曲が出て、テレビにもガンガン出るバンドならこうなってはいなかったかもしれないね。“こうしたら面白くできるかな？”“こうすればお客さんも自分も楽しいだろう”っていうのを毎回更新していって、今のかたちができたんだと思うよ」

――デビュー当時に“こんなバンドにしたい”と思っていたことはありますか？

「“プロになったら毎日ライヴやれるかな？”くらいは思ってたけど。でも、“俺はこういう人間なんだ”って分かった瞬間はよく覚えてるよ。スタレビはデビューから 4 カ月後の 9 月に日本青年館でデビューコンサートをやったのね。1,000 人くらい入る会場だったけど、友達が 200 人くらい集まってくれて(笑)。その時のライヴが思いのほかウケたから、最後にアンコールでステージに出た時に“何かやらなきゃ”って思って、何を思ったのか突然バク転をしたの。そしたら、そこが滑りやすい場所で、顎から落っこちて、血まみれになって…でも、僕はそれにも気づかずニコニコして手を降ってた(笑)。お客さんは“大丈夫かぁ？”って感じで若干引き気味だったけど(笑)、きっとそれが俺でしょ？　“お客さんが盛り上がってくれたら、なんか応えなきゃ”みたいな心が、きっと自分の中にあるんじゃないかな？」

――その気持ちがあるからこそ反射的にバク転をしてしまったってすごいお話ですね。

「それと同じようなことかもしれないけど、風邪をひいてコンディションが悪い時は、僕、アンコールで一曲増やすんですよ。普通なら曲を減らすところなんだろうけど、逆に“お気づきかと思いますが、私、本日風邪をひいております。このスペシャルな声で歌いたい曲があるのでぜひ聴いてください”って言うとみんな笑いながら頷いてくれる(笑)。僕はいつどんな時でも“今日の最善”っていうのがあると思うの。コンディションが悪かろうが、楽器に不備があろうが、今日だからこそできることがあると思うから、それをいつも見つけようとしているかな？」

バンドに対する責任がまた違うところで生まれた

――40 年以上音楽をやっていて、今思うとキツかった出来事はありますか？

「強いて言えばメンバーチェンジだね。僕がなんでバンドをやっているかと言うと、ひとりではできないことをやろうとしているからで、それは 1 年目よりは 5 年目のほうが成長していくんだよね。経験値によってバンドの音も熟成するはずなんだ。だから、デビューした時から“メンバーチェンジをする時は解散をする時だ”ってずっと言ってたんだよ。94 年いっぱいで初代キーボードの三谷泰弘が辞めるって話になった時、僕は“これはもう解散だな”って思ってた。というか、事務所からも切られると思ったんだ。誰もが知ってる、金になるようなバンドでもないし(笑)。ところが、スタッフから“スタレビは続けるべきだ”って言われて、メンバーと話し合って続けることを決めたのね。あの時が一番しんどい時かもしれない。デビュー前は僕が自分で曲を作って歌って、リーダーってこともあってほぼ自分で何でもやってきた。でも、デビュー前にキーボードが脱退することになって、三谷くんが入ってくれて…彼の才能は素晴らしかったよ。キーボードだけじゃなくて、コーラスアレンジだったり、僕の知らない音楽もたくさん教えてくれたしね。80 年代後半からちょうどコンピューターや打ち込みを使った音楽が主流になり、そんな中で彼の音が大活躍してくれたんだ。その流れの中でたくさんの CM ソングをやらせてもらったり、ちょっとおしゃれなシティポップの枠に入れるような曲も作れた。僕もそんなサウンドが大好きだったから何の抵抗もなく受け入れられたけど、僕には作れないと思っていたサウンドだったからね。そんな彼が辞めて、バンドも解散しないなら、僕が再度引っ張るしかないと思ったんだ。やりたい音楽は山のようにあったし、バンドに対する責任がまた違うところで生まれた感じだね。それを 95 年からやり始めて、何となく今も続いてるというところです(笑)」

――では、根本さんの音楽人生の中でのキーパーソンはどなたですか？

「エリック・クラプトンだね。音楽という人生を彼が教えてくれた気がします。彼はいつもブルースを語ってくれたのね。子供の頃、僕は彼らの作るイギリスのブルースしか知らなかったけど、彼はずっとアメリカの黒人たちのブルースを語っていて、そこから僕も興味を持ち始めたんだ。彼らは 60 年代半ばにロンドンにブルースブームを巻き起こし、本国アメリカのブルースマンたち、B.B. キングやハウリン・ウルフやチャック・ベリーをロンドンに招き、紹介したりしてるんですよ。クラプトンはいつも自身のルーツを語った上で自分の音楽を作り続けてて、そういう“人生の音楽”は彼から学びました。人生の中にある音楽の大切さや、人種や国を超えること、自由であることを教えてくれたのは彼です。自分の名前を隠すためにイギリスからアメリカに渡って Derek and the Dominos を作り、女性関係やドラックでむちゃくちゃになったり、お子さんや仲間を亡くされたりもしたけど、どんなどん底でもクラプトンには助けてくれる人がいて、彼はその恩を忘れないんですよ。だから、たくさんの人に語られてるし、そのためのライヴをやり続けているんです。いわゆるエイド的なライヴには必ず参加してるしね。しかも、今もバリバリ現役のブルースマン。…50 年代とか 60 年代には確かに黒人のブルースがあったけど、90 年代、00 年代のブルースを作ったのはエリック・クラプトンですよ。それくらい僕にとっては今も追いかけ続けている存在です。彼の生き様こそがブルースであり、僕の好きな音楽だと思ってます」

取材：千々和香苗

OKmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

Editor's Note of Vol.190

■ GRANRODEO ■
『music UP' s Q!』の「思い出深い一曲」で TOM ★ CAT の「TOUGH BOY」を挙げてくれた KISHOW。この話には続きがあり、アニメ『北斗の拳 2』のオープニングテーマということで衝撃を受けたそうだが、その一期前のオープニング＆エンディングを担当していた子供ばんどの曲も絶賛していた。そんな話を横で聞いていた e-ZUKA はスマホでググり、"あっ、「TOUGH BOY」のプロデュースってうじきつよしさんだ" と子供ばんどの中心メンバーが制作に携わっていたことが判明！　"ということは、うじきさんがすごいんだ！" と KISHOW も納得した様子。さらに「TOUGH BOY」のカップリング曲で、『北斗の拳 2』のエンディングテーマ「LOVE SONG」に至っては編曲が Light House Project で、なんと e-ZUKA の師匠の矢島 賢が手がけていたのだ。KISHOW が "うわっ、あのエンディングも超いいですよ！" と興奮気味に語っていたことも追記したい。

■ 内田雄馬 ■
インタビューの流れでステイホーム期間中に何をやっていたのかという質問になり、内田雄馬が答えたのはゲーム。少し前に他の現場で同じ質問をされた時には、"料理" と答えていたらしい。しかし、"料理よりもゲームをしている時間のほうが長かったことを最近思い出しました（笑）" とのこと。オンラインゲームの『ファイナルファンタジー XIV』をずぅーーーとやっていて（ちなみに話題となった『ファイナルファンタジー VII リメイク』は購入して 3 日で終わらせたそう）、ネット上で声優仲間と一緒に戦ったり、まったく知らない人ともコミュニケーションをとって楽しんでいると語ってくれた。確かに、それはゲーム三昧になりそうだ。

■ 松本太陽 ■
いつもなら超特急のメンバーと一緒に取材を受けているのだが、今回はソロということでひとり。席に着いた際も 7 号車ということで一番右の席が定番だったものが、当然のことながらライターさんの正面に。そんな慣れない感じに最初は "なんか違和感がある" と言いつつも、インタビューにはがっつりと語ってくれた。そして、最後に読者プレゼン用のミニ色紙にサインしてもらうと、そこでも違和感が…。"music UP's" という媒体名をいつもは他のメンバーが書いていたため、どこかぎこちなさがあったり、サインもひとりだから大きく書けばいいのに、どうも 5 分の 1 サイズになってしまうという。なので、メッセージも書いてもらったのだが、それでもまだ余白が…。まぁ、そこはご愛敬ということで。

■ vivid undress ■
取材終了後に読者プレゼント用のサインを書いてもらった際、書き始めようとした rio に編集部の石田が媒体名である "music UP's" を書いてもらうようにお願いすると、なんとミニ色紙の半分を占める大きさで書いてくれた。そのインパクトに負けないようにバンド名も大きく書いてくれたのだが、それだけでほぼ色紙の面積が失われるという事態に…。なんとか空きスペースにふたりがサインを書き、今回の作品名も入れてバランスをとり、"いい感じになりました！" と満足げな rio。UP's 読プレ史上最大の媒体名＆バンド名入りのサイン色紙となったことは言うまでもないでしょう。

■ OKAMOTO'S ■
コロナウィルス感染予防の対策でオンラインにてインタビューを行なった今回。取材開始前に回線が不調の中、さまざまな対応をしてくれたオカモトコウキが画面を見ながら "ショウくんの回線も不調じゃない？　止まってるよ" と問いかけた。しかし、オカモトショウはただ動かずに画面を見ていただけ（笑）。"オンラインあるあるだよね" という話が出るなど、冒頭から和やかなムードに。また、『music UP's Q!』でショウが楽曲の説明をしてくれている時には、コウキがギターを取り出してフレーズを弾きながら "これだよね！" と語る場面も。自宅から参加しているからこそ、このフラットな雰囲気が生まれてくるのはオンライン取材のいいところだろう。

■ 尾崎由香×コレサワ ■
レコーディングとラジオなどで顔を合わる機会はあったが、ゆっくりと話すのは初めてだったふたり。インタビューからも伝わるが、それぞれがもっと仲良くなりたい！ という気持ちがあふれていて、話の途中で目が合うと照れ合う姿が印象的だった。恋愛感に関しては対極的なふたりだからこそ、"それは私にはない感覚で面白い！" とガールズトークが止まらず、取材はあっと言う間に終了。取材後、コレサワの 1st シングル「憂鬱も愛して」【れ子ちゃん盤】に付属される "れ子ちゃん" のぬいぐるみを抱きしめながら "これ欲しいな…" とつぶやく尾崎に "CD 出たら送るねー！" と笑顔で応えるコレサワ。ふたりのやりとりを見ていると、すぐにでもコラボの第二弾が実現するのではないかと期待が膨らみました。

■ MORISAKI WIN ■
デビュー EP『PARADE』の話は取材後も続き、J-POP よりも洋楽的な作品となっていることから、"翼くんがサンプリングして DJ の時に使いそう" とライターの土屋恵介さん。それを受けて MORISAKI WIN は "翼に「WonderLand」を聴かせたら "オーマイガー！" と言ってましたよ" と話し、"でも、翼は絶対に使わないです。嫉妬してるから（笑）" と語る。とは言いつつ、コアな R&B に造詣が深い翼に対して "そういう音楽を流すラジオ DJ になるとか、そういうジャンルの音楽ライターになるとかしてもいいと思うんですけどね" と気遣い、グループは解散してもメンバー間の仲の良さは変わっていないことを実感。ただ、翼の趣味がアンダーグラウンドすぎるため、一般的な需要がないと土屋さんに指摘されていた…。

Vol.191 は 9 月 20 日発行予定。お楽しみに !!

music UP's 読者プレゼントコーナー

直筆サインを各 1 名様にプレゼント !!

1.GRANRODEO
2.OKAMOTO'S
3.内田雄馬
4.畠中 祐
5.松尾太陽
6.MORISAKI WIN
7.むぎ（猫）× つじあやの
8.尾崎由香 × コレサワ
9.SIZUKU with MAZAKI
10.HoneyWorks
11.Mary's Blood
12.vivid undress
13.Oh my!
14.Gorilla Attack

Vol.190 の締切は 9 月 19 日。当選者の発表は発送をもって替えさせていただきます。

Listener's Voice of Vol.189

坂本真綾さんの 20 年来のファンです。以前に比べ、ほんとにいろんな方々とコラボをしていて、幅がものすごく広がってきていると感じていましたが、そのきっかけや想いがインタビューから感じられて良かったです。
（30 代・女性・林田美香）

坂本真綾さんのインタビューが面白かったです。シングルコレクションなのでシングルで発売したアニメのタイアップ曲の収録が多いですが、アニメ作品という非日常的な世界観のテーマソングたちだからこそ、個性的なアーティストの方と出会い、挑戦の場となっているというのは確かに！と思いました。でも、こんなにたくさんの個性を "坂本真綾" として違和感なく表現できるのが、真綾さんのすごいところだと改めて思います。次の新曲「独白」も一層楽しみになりました。
（20 代・女性・芳賀 智子）

長谷川白紙さんのインタビューが良かった。最近どんどんハマって白紙さんの音楽（性）や表現にどっぷり浸かっているから。
（50 代以上・男性・伊藤博之）

アニオタで元 8 号車で現 Girls² ファンをしているので内容がとても充実していました。坂本真綾さんの「独白」が androp の内澤崇仁さんの提供だったり、逆に坂本真綾さんが Negicco に提供してたり、知らないことがたくさん知れて良かったです。超特急の記事を久々に見て "みんな大人になってる" って思いました。タクヤさんが相変わらず美意識高くて、風呂の湯船に浸かってるっていう文を見て "ハ～！　やっぱりすごいな～" って思ったのと、リョウガさんがほんとにオタクを前面に出してきてるなって思いました。最高！　この記事を見て元 8 号車だけど、新曲聴こうと思いました。一緒に 8 号車をしていて今でも 8 号車している友達とは疎遠になってしまったけれど、きっと彼女もこの記事を見ていると思うので、この記事を通してまたつながれたのがなんだかグッときます。Girls² のインタビューはほんと若い！　可愛い！と思いました。文字は黒いのに脳内再生でカラフルに彼女たちの声が聞こえてくるようでした。リモートでのインタビューで大変だったと思いますが、それが逆に彼女たちの素が見れたような感じがします！
（20 代・女性・ぶっきー）

超特急の特集をとても楽しく拝見させていただきました。8 号車の日の配信シングル「Dear My グッバイ」は歌詞と曲調がミスマッチという謎のベールに包まれていましたが、今回の特集を読んで何となくイメージが湧きました！　そして、歌詞が発表されてから 8 号車の間でさまざまな憶測が飛び、少し不安になっていましたが、"そんなことはないんだ！" と気持ちも晴れやかになり、メンバーの想いも知れたので、さらに超特急が大好きになりました。メンバーはあまり事前に新曲についてリサーチしないでほしいと言っていましたが、music UP 's さんの記事を読んで良かったです。本当にありがとうございます。
（20 代・女性・大貫美幸）

多くの年代に刺さるフリーマガジン！　紹介されたアーティストみんなが気になりはじめて、Google 先生への質問が止まりません（笑）。
（40 代・女性・しおママ）

気になっていた方、今注目してる方が集結してるなと思いました。私自身も超特急はもちろんのこと、kobore も好きですし、みねこ美根さんや Ran ちゃんなど、気になっている方の記事も見れてとても良かったです！　旬な方やこれから来るいわゆるネクストブレイクの方を特集されているので、見ていて新しい出会いばかりで楽しかったです！
（10 代・女性・田島桃子）

8 歳の娘と Girls² を応援しています。Girls² のインタビューは各曲について語っているものは初めて拝見したので、いろいろと新鮮でした。メンバーの可愛らしい面も垣間見えて楽しかったです。Girls² 目的で拝読しましたが、『LISTER'S VOICE』や『EDITOR'S TALK SESSION』を読んで、コロナ禍の音楽業界やファンのみなさんの状況に心苦しくなりました。ですが、前を向いていらっしゃる様子も見えて、音楽業界が元気を取り戻せるといいなと思いました。早く、みんなが楽しく思いっきりエンターテインメントを楽しめるようになることを願っています。
（30 代・女性・みおり）

遠藤正明さんの記事をありがとうございます。今年はコロナの影響で遠藤さんはじめ多くのアーティストさんたちのライヴが中止になって落ち込んでいた自分にとって唯一、闇の中の一条の光のような明るいニュースだったからです。子供の頃夢中になって『ウルトラマン』を観て育った遠藤さんのアツい想いが伝わってきました。
（50 代以上・女性・古屋直子）

×ジャパリ団のインタビューは "リーダー（ポンコツ）" や "可愛い（嘘）"、"ツッコミ（仮）" という 3 人のキャラが爆発していて面白かったです。アニメ誌ではなく、音楽情報誌でもそんな彼女たちの記事が読めたのが良かったです。
（20 代・男性・春日）

イヤホンズのインタビューはユニットとしての 5 年間での変化と進化、アルバム『Theory of evolution』の収録曲についてのお話がたっぷりと聞けて楽しかったです！　私も「忘却」と「再生」を同時再生してみようと思います !!
（30 代・男性・アウラの黒髪）

7 月 22 日にタワレコと新星堂に行きましたが、もう捌けていて手に入らなかったのがとても残念でした。誌面の内容を PDF で読めてありがたかったです。でも、紙が好きなので、手に入れたかったです…。
（30 代・女性・山口いずみ）

視聴回数やダウンロードで音楽が選別されることのない音楽業界になってほしい。こういう冊子がインタビューを読んで気になって聴いてみるとか、自分のテリトリーじゃない音の範囲にも触れるきっかけになってほしいです。昔よりこういった冊子は減ってますが、音楽が好きな人にはいい出会いに使ってほしいです！　私も学生の頃は自作で CD 店の冊子みたく真似て、自分発の冊子を手作りしてました（^o^）
（10 代・女性・みーちゃん）

▸▸ 読者プレゼントの応募やコメントは Twitter ＆読者プレゼント専用フォームから ◂◂

★ Twitter からの応募

1. music UP' s のTwitterアカウント（ @music_ups ）をフォロー。
2. 希望のアーティストの直筆サインプレゼントについての
   ツイートをリツイート。

※いただいたコメントは『Listener' s Voice』内で
　ご紹介させていただく可能性がございます。
※当選者には DM にてご連絡させていただきます。

music UP' s Twitter アカウント ▶
https://twitter.com/music_ups

★読者プレゼント専用フォームからの応募

music UP' s 読者プレゼント記事よりご応募ください。
コメントもお待ちしています♪

※いただいたコメントは『Listener' s Voice』内で
　ご紹介させていただく可能性がございます。
※当選者にはメールにてご連絡させていただきますので、
　予め「@music-ups.jp」のドメイン解除をお願いいたします。

music UP' s 読者プレゼント記事▶
https://musicups.page.link/2008_present

EDITOR'S TALK SESSION 09

今月のテーマ：配信ライヴが今後のシーンにもたらすもの

BARKS、OKMusic、Pop'n'Roll、全日本歌謡情報センターという媒体が連携する雑誌として立ち上がったmusic UP' s だからこそ、さまざまなテーマを掲げて、各編集部員がトークセッションを繰り広げる本企画。第九回目はコロナ禍の中、配信ライヴを積極的に行なっているバンドということで、バックドロップシンデレラの豊島"ペリー来航"渉(Gu＆Vo)とオメでたい頭でなによりの赤飯(Vo)に参加してもらった。

座談会参加者

■烏丸哲也
ミュージシャン、『GiGS』副編集長、『YOUNG GUITER』編集長、BARKS 編集長を経て、現JMN 統括編集長。髪の毛を失った代わりに諸行無常の徳を得る。喘息持ち。

■石田博嗣
大阪での音楽雑誌等の編集者を経て、music UP's ＆ OKMusic に関わるように。編集長だったり、ライターだったり、営業だったり、猫好きだったり…いろいろ。

■豊島"ペリー来航"渉
バックドロップシンデレラの Gu＆Vo であり、ライヴハウス池袋 LIVE GARAGE Adm の店長。世界の民族音楽が好きでウンザウンザを流行らせようとしている。

■千々和 香苗
学生の頃からライヴハウスで自主企画を行なったり、実費でフリーマガジンを制作するなど手探りに活動し、現在は music UP's ＆ OKMusic にて奮闘中。マイブームは韓国ドラマ。

■赤飯
日本一オメでたい人情ラウドロックバンド"オメでたい頭でなにより"のヴォーカル。サウナ、ホラー映画をこよなく愛する男。

■岩田知大
音楽雑誌の編集、アニソンイベントの制作、アイドルの運営補佐、転職サイトの制作を経て、music UP's ＆ OKMusic の編集者へ。元バンドマンでアニメ好きの大阪人。

ライヴがなくなって すっかり意気消沈

千々和：今回は配信ライヴを行なっているバンドにお話をおうかがいしたく、おふたりに参加していただきました。コロナ禍でライヴができなくなり、思うように活動もできない現状についてどう思われていますか？

赤飯：オメでたい頭でなにより(以下、オメでた)はお客さんとの距離が近いのライヴに重きを置いているバンドだと僕は思っています。それこそが一番大事にしているもので、自分自身もそれを正しいと信じて、それに生き甲斐を感じてライヴをしていました。しかし、その生き甲斐であり、"バンドの武器"と考えているライヴが封じられている現状です。すっかり意気消沈してしまいました(笑)。だって、ほぼ毎週一本はやっていたものですから。

豊島：思ったよりも深刻だったよね。バックドロップシンデレラ(以下、バクシン)はライヴをやると密々の密な感じで、ソーシャルディスタンスもないのですが、それが持ち味だという自覚がある中で、そのライヴができない状況になった。もともとライヴが多かったバンドではあったんですが、実はそんなにバンドとして意気消沈みたいな感じではなくて。ちょっとした開き直りみたいなところもあるというか、周りのバンドもライヴをやれていないんだから仕方ないっていう節がありましたね。逆に今まで忙しかったから、ヴォーカルのでんでけあゆみに関してはちょっと喜んでいたり(笑)。

全員：(笑)。

豊島：もちろん最初のうちだけですけど(笑)。ライヴがないということでは、今のところ"まぁ、大丈夫かな"と思ってはいるんですけど、経済的な話になってくると若干昨年よりは大変ですね。

千々和：そのような状況から配信ライヴをやるために動き出したのはいつ頃ですか？

豊島：僕が池袋 Live garage Adm というライヴハウスで店長をしているということもあり、配信ライヴを池袋 Adm でやろうと動き始めたのは、緊急事態宣言が発動された瞬間からでした。4 月 7 日に発動されて、4 月の後半くらいからは自分のバンドではないんですけど、他のバンドで配信ライヴのブッキングを始めましたね。池袋 Adm で弾き語りの配信ライヴを最初にやったのは僕で、そのライヴをやった日にバクシンでもやろうと決めて、5 月 31 日にバンドでもやったんです。

石田：その弾き語りライヴで何か手応えを感じられたんですか？

豊島：想像していたよりも楽しかったんですよ。性格にもよるかもしれませんが、お客さんがいると良くも悪くもお客さんを意識しすぎてしまうところがあって。弾き語りをひとりでやってみた時、最初は MC で何をしゃべっていいか分からなかったりした部分もあったんですけど、90 分くらいのライヴだったので演奏している間に音楽だけにのめり込んでいく感覚があって、これはこれで気持ちが良いと思ったんです。これを自分のバンドでもやってみたいっていう手応えを感じたというか。

石田：その弾き語りですが、スタジオで演奏するのとはまた違った感覚だったのですか？

豊島：スタジオで演奏する時もだんだん音楽に入り込んでいくじゃないですか。それに近い感覚があったので、そこが良かったんですよ。だから、すごく自分の中で音楽的だったというか…。

石田：なおかつ、それをいろんな人が観てくれているわけですしね。

豊島：そうなんですよ。観てくれている感覚はありましたね。でも、どっちかというと弾き語りの時は自分の世界だけにどっぷりハマってしまった感じで、バンドでライヴをやった時にもっと観てくれている感覚がありましたね。

千々和：バンドによって配信ライヴでのアプローチも違ってきますよね。渉さんが話されたようにのめり込んで演奏をする方がいれば、画面の向こうで観ているお客さんを意識したユニークな演出をする方もいて。オメでたの 2 回目の配信ライヴを拝見させていただいたのですが、番組のパロディーやコントを取り入れていて面白かったです。準備が大変そうな気もしましたが、一回目の配信ライヴの時点で早くから動き出していたんでしょうか？

赤飯：予定していた振替ライヴが全部キャンセルになった時に"9 月までライヴができないのは嫌だから配信ライヴをやろう！"ということになったんですね。そこから内容を詰めていき、準備を本格的に進めたのは 6 月 29 日の配信の 1 カ月前くらい前…5 月頭から準備をし始めましたね。"いかに目の前の人に楽しんでもらい、笑ってもらうか"にプライオリティーを置いているバンドなので、前々からライヴでコントをやりたいという話は出ていたんですね。今回配信をやるにあたり、"普通にライヴをやっても、やっぱり表現したいものにはならないよなぁ"と思いまして。それならいっそ今回をきっかけにしてしまえということで、がっつりコントを入れた形式にしました。つながりのあった作家さんにもチームに入っていただいて、やりたいことやアイディアを一緒に整えてもらいながら、リハを進めていきました。ああでもない、こうでもないと実際の場当たりを通して肉付けもされていきましたね。で、第一回目の配信をやってみて、"改善点が多いな！"とすごく思ったんですよ。コントと曲のバランスというか、曲が少なかったよなって(笑)。

全員：(笑)。

赤飯：あと、進行がダラダラしたのもあって"あかんな～、これでは"って。そんな反省点を第二弾につなげた結果、自分も含めてチーム全体に手応えがあったと思っています。

烏丸："ライヴができなくなって意気消沈"とのことでしたが、配信ライヴを通して新たなバンドの観せ方やエンターテインメントのかたちが見えてきたのではないですか？

赤飯：そこまでのことは言えないですが、コロナをきっかけにどう変わっていくのか、どう適応していくのかを考えられないと、もう死ぬだろうなとは思いましたね。

現場感があるライヴを 目指していけばいい

岩田：オンラインのライヴに対して音響や演出、カメラワークなどこだわる点がアーティストによって違うと思うんですが、おふたりはライヴをやってみて、今後はどこにこだわりを持ってライヴをしていきたいと思われますか？

豊島：僕らは『ビバラ！オンライン2020』に出演させてもらって、ヴォーカルが頑張ってたんですよ(笑)。そして、ライヴに対する視聴者の投票をチェックしていた時に、"バクシンがお客さんとの距離が一番近かった"というコメントがたくさんあったんです。それはヴォーカルが頑張ったからなんですが、そういうふうに感じてもらえるんだと思えて。僕らはもともと踊る奴が偉いだとか、そういう現場感を大切にしていたバンドなので、オンラインでもどのバンドよりも現場感があるライヴを目指していけばいいと思うことができましたね。

岩田：お客さんとの距離が近いという反応があったのは、どこを工夫されたからだと思いました？

豊島：単純に言うと、あゆみがひとつのカメラに迫って行って、ワーッとお客さんひとりひとりに語りかけたというのが分かりやすい点ではありましたね。あと、あり得ないくらいひとりで踊ってましたよ(笑)。でも、そこまでやると何か伝わるものがあるのかもと思えて。だからこそ、そういう観せ方も面白いのかなと。

赤飯：2 本目のライヴではコントで笑いを生みながら音やカメラワークにもこだわり、演奏もしっかりとしたライヴをやって、自分たちも納得できるものをみんなに届けられたという満足感があります。結果、観てくださった人から"ゲラゲラ笑って最後は泣けた"なんて感想を結構いただけたので、めちゃくちゃ嬉しかったです。さっき渉さんが言われていた"お客さんとの距離感"を次はもっと意識したステージングにしたいですね。あゆみが"おらー！"ってやってるのが伝わったということだったので、僕も次やってみようと思いました(笑)。

豊島：コロナに関係なく、ライヴというのは感動だったり何かしらでお客さんの心を動かせるものだと思うので、それは僕らもオメでたもやり方が違えど目指していたもののはずなんですよね。当然、配信でもそこを目指したいと思います。そのためには、カメラや音質というクオリティーに対しても意識しないといけない。結果的に普段のライヴに近いものを目指していますね。

赤飯：普段のライヴをやっているからこそ、その熱量を高めてどうやって届けていけるのかというところで、カメラワークなど技術的な面を表現も含めて磨いていかないといけないと思いますよね。

豊島：そこに対して、赤飯も"チーム"という言葉を多く使っていたけど、バンドだけではどうしようもないということがあるんですよ。配信ライヴはカメラワーク、スイッチャーや音響などひとつでもダメだと、僕らがどれだけいいパフォーマンスをしても伝わらない可能性がすごくある。

赤飯：その全体のグルーブを届けるという点は配信の面白さなのかなと思いますね。

okmusic
この座談会の全文を公開中!!▶
https://okmusic.jp/

■バックドロップシンデレラ オフィシャル HP
http://backdropc.com/

■オメでたい頭でなにより オフィシャル HP
https://www.omedeta.band/

BARKS
https://www.barks.jp/

Shibuya O-Group

http://www.shibuya-o.com

3 週連続企画

circle HUMANisM ～東京夏の大三角形～

～デネブ・ザ・ベストテン～

2020 8.21 Fri. 19:00/19:30 下北沢 SHELTER

みなさんからのリクエストTOP10やります ※有料生配信あり

～旋律のベガ～

2020 8.28 Fri. 18:30/19:00 渋谷・TSUTAYA O-Crest

挑戦。 ライブハウスで椅子席全曲バラード縛り ※有料生配信あり

【 ticket 】一般発売日:下北沢 8/15(土)～ / 渋谷 8/22(土)～ 詳しくはOfficial HPまで

Halo at 四畳半ワンマンツアー2020 振替公演

“無垢なる祈りの宿し方”

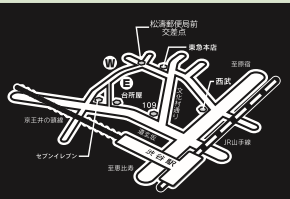
2020.09.08 火 福岡 BEAT STATION
2020.09.16 水 名古屋CLUB QUATTRO
2020.09.24 木 仙台 MACANA
2020.09.25 金 新潟 GOLDEN PIGS RED STAGE
2020.09.30 水 広島 SECOND CRUTCH
2020.10.01 木 高松DIME
2020.10.13 火 Zepp DiverCity(TOKYO)
2020.11.25 水 大阪BIGCAT

詳しくはOfficial HPまで

TSUTAYA O-EAST TSUTAYA O-WEST TSUTAYA O-nest TSUTAYA O-Crest Yokohama O-SITE

INFORMATION 公演に関するお問い合わせは直接各店舗までお願いします。

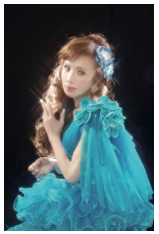
TSUTAYA O-EAST TEL:03-5458-4681 TSUTAYA O-WEST TEL:03-5784-7088
TSUTAYA O-nest TEL:03-3462-4420 TSUTAYA O-Crest TEL:03-3770-1095
Yokohama O-SITE TEL:045-328-3090 ※横浜駅相鉄線みなみ西口より徒歩7分



全日本歌謡情報センター編集長 仲村 瞳の スターの証明

第 15 回／弘田三枝子

歌謡界のスーパースターと称される人物を取り上げ、さまざまな資料から、その人物の“すごさ”を浮き彫りにする証言集。今回は 2020 年 7 月 21 日に心不全のため惜しくもこの世を去った、「人形の家」の大ヒットでお馴染みの天才歌手・弘田三枝子をフィーチャー。



ヒロタミエコ：1947 年 2 月 5 日生まれ、東京都世田谷区出身。歌手。1961 年、”和製ブレンダ・リー”のキャッチフレーズで、14 歳の頃に「子供ぢゃないの」でデビュー。ポップスクィーンとして昭和の歌謡史にその名を刻んだ。2020 年 7 月 21 日、死去。享年 73。

「戦後最高の力量をもつシンガーのひとり」

シンガーソングライター 山下達郎

『中日スポーツ』（山下達郎「戦後最高の力量をもつシンガーのひとり」亡くなった弘田三枝子さんをしのぶ／2020 年 8 月 2 日発行）より

「その頃のスターは、ビートルズの〈抱きしめたい〉を日本語で歌ったスリー・ファンキーズ、ツイストの藤木孝、ジェリー藤尾、飯田久彦、鹿内タカシ、パラダイス・キング。女性では、ダイナマイト娘・弘田三枝子が凄いシャウトしよった」

ロックミュージシャン・鮎川誠

『“60s ロック自伝』（著・鮎川誠／音楽出版社／ 2006 年 6 月 2 日発行）より

「『ヴァケーション』は各社競作だった、それがイヤだったからわざと『リトル・ミス・ロンリー』を A 面にしたんです。そうしたらやっぱり『ヴァケーション』の方が売れて、各社から出た（青山ミチ、金井克子、伊東ゆかり他）中で弘田三枝子が断トツで。〈中略〉歌謡曲の美空ひばりさんに匹敵するような声だった」

音楽プロデューサー（東芝）草野浩二

『シンコーミュージック・エンターテイメント』（「ヒットソングを作った男たち」伝説のヒットメーカー 草野浩二氏、酒井政利氏が語った制作現場／トークイベント「音楽の DNA ― ヒットソングにビジネスを学ぶ」VOL.1／ 2019 年5月 11 日開催）より

「存在自体がポップ。ビート感いっぱいのポップスで笑顔、ダンスを画面いっぱいに（使って）歌われていた。とにかくナンバーワンでした。チャーミングでね。みんなの憧れで」

ミュージシャン・桑田佳祐

『スポーツ報知』（サザン桑田佳祐、弘田三枝子さんを悼む「ナンバーワンでした。チャーミング。みんなの憧れ」／ 2020 年 8 月 1 日発行）より

「同時期にデビューした唯一の歌手です。デビューした頃は凄い迫力でダイナマイト娘と呼ばれて、私は全くかなわない人でした」

歌手・中尾ミエ

『Sponichi Annex』（弘田三枝子さん訃報に中尾ミエ「全くかなわない人」園まり「悲しすぎます」菅原洋一「天才でした」／ 2020 年 7 月 28 日公開）より

「原点は‘60 年代の欧米ポップス。ニール・セダカなどの作品を日本人歌手が訳詞で歌っていたもの。（弘田三枝子さんや坂本九さんなど）」

シンガーソングライター 竹内まりや

『WARNER MUSIC オフィシャルサイト』（竹内まりや／「TRAD」Q&A／ 2014 年 9 月 10 日発売「TRAD」7 年ぶりのニューアルバム！／まりやに聞いてみよう！／ 2014 年公開）より

「坂本九の『上を向いて歩こう』、弘田三枝子の歌声のオリジナリティ、そしてクレイジーキャッツのサウンド、これがポップスの三大要素なのだ。これさえあれば鬼に金棒、金魚にごゴボウ、ポップスの御飯、味噌汁、キューリ漬けなのでありまする」

ミュージシャン・大滝詠一

『TAP the POP』（27 歳になった大滝詠一を待っていたのは、地獄の責苦のようなハード・スケジュールだった／ 2017 年 7 月 15 日）より

「昭和 30 年代中頃、日本の芸能界登場と同時に弘田三枝子が世間に与えた衝撃は大きい。その稀有な歌唱力、リズム感、躍動感は傑出していた。歌手では較べられる者がいなかった」

音楽評論家・湯浅学

『日本コロムビアオフィシャルサイト』（恋のクンビア 21／弘田三枝子（MICO）永遠の歌姫には誰もかなわない／文：湯浅学／ 2006 年公開）より

「（都はるみは、）当時、ポピュラー歌手として人気絶頂であった弘田三枝子の歌い方を模倣することで、あの唸りを身につけた」

音楽学者・輪島裕介

『大人の Music Calendar』（都はるみのあの「うなり節」は弘田三枝子からのものだった…本日 2 月 22 日は都はるみの誕生日／ 2016 年 2 月 22 日公開）より

アルバム『弘田三枝子 ゴールデン☆ベスト』

2019 年 2 月 20 日発売
COCP-40706
¥2,200（税抜）
※高音質 CD「UHQCD」採用

シングル「悲しい恋をしてきたの」

2015 年 10 月 21 日発売
COCA-17059
¥1,204（税抜）

全日本歌謡情報センター
この記事と他の証言を掲載中▶

一曲を通して一冊の少女マンガを読んだような感覚を味わってもらいたい

胸キュンの楽曲とストーリーで、映画や小説などメディアミックス展開を繰り広げる『告白実行委員会』シリーズが好評のHoneyWorksが、CHiCO with HoneyWorksの3rdアルバムを含む4カ月連続リリースの第一弾として両A面シングル「ヒロインたるもの！ feat. 涼海ひより（CV：水瀬いのり）/ 1%の恋人 feat. 南（CV：豊永利行）」をリリース。シリーズ既発曲「ヒロイン育成計画」と「映えラヴ」の気になるその後を描き、今後の新展開を予感させる2曲になった。

――4カ月連続リリースの第一弾を涼海ひよりと南くんの曲にしたのは、何か意図があってのことですか？

shito：特に意図があったわけではないんですけど、今年でHoneyWorksが結成10周年で、現在事前登録受付中の公式リズムゲーム『HoneyWorks Premium Live』のオープニングで流れる新曲を作ろうということで、どのキャラクターの新曲が欲しいか3人で話し合って、本当に自分たちが書きたいように曲を書かせていただきました。その上で"CDとしてリリースさせてください！"とレコード会社の方にご相談したんです。

Gom：キャラクターを掘り下げて曲を作っているのは、それをコミケなどで販売することができたからなんです。それがコロナの影響でコミケも中止になってしまったんですけど、それでも『告白実行委員会』を走らせていたいという想いがあって。それに、もっと密度の濃い世界にしたいというのもあり、今回の連続リリースという企画が生まれました。

――涼海ひよりと南くんの曲は、今年の1月にリリースしたアルバム『好きすぎてやばい。～告白実行委員会キャラクターソング集～』にも収録されていましたが、ファンからも反響が大きかったですか？

shito："続きが気になる"とか"こういう展開になってほしい"とか、たくさんの声をいただきました。曲を作るキャラクターを決めたり、曲の方向性を決める時は、そういうファンのみなさんの声も参考にさせてもらっています。要望に応えてみたり、逆に裏切ったりすることもあります（笑）。

――まず「ヒロインたるもの！ feat. 涼海ひより（CV：水瀬いのり）」は、『好きすぎてやばい』にも収録された前作「ヒロイン育成計画」の、その後みたいな感じですね。

shito：はい。時系列的にはそうです。

――涼海ひよりはどんなイメージでキャラを作ったのですか？

ヤマコ：今までのようなヒロイン然とした女の子ではなく、ちょっとずれた、ヒロインらしからぬ女の子を新しく出したいというところで、最初にビジュアルが出来上がりました。その後、設定とかを細かく詰める前に、ビジュアルだけ先にMVで出しちゃったんです。

shito：CHiCO with HoneyWorksの「恋色に咲け」（2016年4月発表のシングル）という曲のMVのラストに、ちょっとだけ出てくるんですよ。

――どなたかモデルはいたりするんですか？

ヤマコ：モデルはいないですけど、名前が決まるまでは"芋子"と呼んでいたくらい、田舎のダサい女の子というイメージでした。

――「ヒロイン育成計画」では、その芋子をヒロインに仕立て上げ、でも恋は実らなかった。それでもまだヒロインを目指して頑張っているという。そんな健気なひよりの楽曲は、前作同様に明るくポップでユーモアもあるイメージですね。

shito：天真爛漫なイメージで、他の曲よりも派手めに、聴いた方が元気になってくれるようなサウンドを意識して作っています。

――間奏からDメロにかけて「結婚行進曲」が出てきたり、突然和風になるところもあったり。

L→R　Gom（Composer）、ヤマコ（Illustrator）、shito（Composer）

Gom：クラシック音楽を取り入れるのは、「告白予行練習」（2014年1月発表のアルバム『ずっと前から好きでした。』収録曲）からやっていて。クラシックは聴く人全員に共通したイメージを浮かべてもらえるので、場面転換にはすごくいいんです。

shito：そういうアイディアは最初から入れようと決めているわけではなくて、"次の展開はどうしようかな？"と考えているうちに思いつく感じです。要は遊び心ですね（笑）。和風になるところは尺八と三味線を入れて遊んでみました。

Gom：いきなり和風になるから、作詞の時は"どうしよう～"って思いましたよ（笑）。

――歌詞で意識することは何ですか？

Gom：鉤括弧（かぎかっこ）で台詞を入れることは意識してますね。ですます口調もよく使いますし。そうすることで人としての存在感が増して、キャラクターが生きてる感じが出るんですよ。

shito：あと、歌詞に絵文字を使うことも多くて。それは歌詞を見た時の入りやすさもそうですが、友達とのLINEを見ているような感覚を味わっていただきたいと思って使っていますね。

――また、「1%の恋人 feat. 南（CV：豊永利行）」も『好きすぎてやばい』に収録の「映えラヴ」の後日談とのことで。「映えラヴ」の時の女の子にフラれちゃったんですね。

Gom：そうなんです（笑）。南くんの楽曲は他の子とは少し違っていて。南くんは芸能活動をやってて、前回は「映えラヴ」という曲のMVに出ている設定だったんです。そこで共演した女の子のことを本当に好きになってしまって…というのが、今回の「1%の恋人」です。だから、南くん自身のキャラクターソングは今回が初めてになります。

――なるほど。それにしても、男性が聴いて"分かる分かる"ってなる感じの曲ですね。

Gom：そうですね。男って勘違いしがちじゃないですか。特に若い時って"もしかして自分のことを好きなのかな？"とか、いろいろ考える時期なので。そのへんで、共感してもらえたら嬉しいです。

――Gomさんも若い時はそういう経験が？

Gom：そうですね。"いけるんじゃないかな？"と勘違いして玉砕したことが多々ありました（笑）。

shito：あったんだ（笑）。僕は慎重派なので1パーセントの可能性じゃとてもじゃないけど踏み出せない。小心者なんです。

ヤマコ：…（笑）。

――南くんのキャラクターは最初はどんなイメージで？

ヤマコ：サポートメンバーのモゲラッタがメインで作ったキャラクターなんです。私が描くとどうしても引き出しが足りなくなってしまうんですけど、モゲラッタが描いたことでビジュアル的にも今までになかったものになりました。

――南くんって名字でも下の名前でもなく、ただ"南くん"なんですね。

ヤマコ：そうですね（笑）。LIP×LIPの「ロメオ」（2017年12月発表のシングル「ノンファンタジー / 必要不可欠」収録曲）という曲の登場人物が"東の国の王子"と"西の国の王子"だったので、そんなLIP×LIPに関わるキャラクターということで"今度は南だな"っていう感じで決まりました。

――未だに謎多き南くんですけど、今回の曲で年上が好きなことが分かりました。

Gom：そうですね（笑）。「映えラヴ」の時はそこまで決まっていなかったんですけど、今回の「1%の恋人」を作る上で決まった設定です。年上が相手のほうが同級生よりも届かない感じがあるし、切なさも増すと思って。きっと聴いてくれる男の子も年上に憧れることがあると思うし。

――《「君のニオイが好き」》とか結構生々しい部分もありますね。

shito：一曲を通して一冊の少女マンガを読んだような感覚を味わってもらいたいというのがHoneyWorksとしてあるので、この曲でもそれを意識しました。なので、冒頭はインパクト重視でいこうとということで、《「ごめん友達のままでいたい」》で始まるんです。

――いきなりフラれる言葉で始まる曲はなかなかないですよ。

shito：すごくインパクトが出せたと思います。「ヒロインたるもの！」とは真逆のテイストなので、聴く人もテンションが上ったり下がったり、忙しいかもしれませんね（笑）。

取材：樽林史章

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

「ヒロインたるもの！ feat. 涼海ひより（CV：水瀬いのり）/ 1%の恋人 feat. 南（CV：豊永利行）」

Single　8/26 Release
MusicRay'n

【初回生産限定盤】
（CD+グッズ）
SMCL-665～6
￥1,500（税抜）
【通常盤】（CD）
SMCL-667
￥1,000（税抜）

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■Gom…「ブラック★ロックシューター」（'09）／ supercell
「この曲を"歌ってみた"に投稿して再生回数が結構伸びたことで、ryoさんと知り合うことができたし、音楽業界に入ることができた…それこそこの曲きっかけで『Animelo Summer Live』のステージに立てたりもして、挫折も含めて酸いも甘いも知ったので（笑）。もちろん楽曲の素晴らしさに惹かれて歌いたかったわけですけど、いろいろ思い出が詰まった曲ですね」

■shito…「小さな恋のうた」（'01）／ MONGOL800
「学生時代にモンパチがすごく流行ってて、この曲をコピーしてました。直接的なきっかけというわけではないんですけど、モンパチは"バンドをやってみたいな"って思った特別な存在でしたね。こういうシンプルな曲を作りたいと思って最近聴き直して、改めて"いい曲だなぁ"と思いました」

■ヤマコ…「黒いブーツ ～oh my friend～」（'98）／ SOPHIA
「この曲の歌詞って物語になってるんですけど、実体験をもとに書いたっていうのをインタビューで読んだことがあるんですね。学生の頃、その歌詞に沿ったオリジナルの漫画をノートに書いてたんですよ。誰に見せるわけでもなく、勝手に登場人物を作って（笑）。でも、それって今やってることと、あまり変わらないっていう。だから、そこに私の原点があるのかなって。物語系の音楽が好きになったのも、この曲がきっかけかもしれない」

Mary's Blood らしさはちゃんと残せた

アニメへの造詣が深いことでも知られる Mary's Blood がアニソンのカバーアルバム『Re>Animator』を完成させた。陰陽座の「甲賀忍法帖」や X JAPAN の「Forever Love」、L'Arc-en-Ciel の「Driver's High」など原曲がバンドサウンドのものがメインだが、「unravel」や「ウィーアー！」など“どんなアレンジになってるの？”と気になる選曲も。彼女たちのアニメ愛とその熱量をじっくり聴いてほしい。

――初のカバーアルバムを制作することになった経緯というのは？

EYE：昨年のハロウィンイベントで、メンバーがコスプレをしてアニソンのカバーをやったんですけど、それを観ていたレコード会社の担当さんから“みんなアニメ好きなのかい？　じゃあ、次はカバーアルバムやる？”みたいな話をされたのが最初ですね。でも、企画モノとしてカバーしましたっていうんじゃなくて、自分たちの思い入れがある曲とかバンドの作品ばかりを選曲して挑戦できたので、自分たちらしい作品にはなったと思います。

――アニソンとメタルって相性がいいですよね。

EYE：ANIMETALさんが過去に実証済みですからね(笑)。

――曲の世界観とかメロディーのドラマチックさとか共通するところがあるし。

SAKI：ANIMETALさんがやってたのって、往年の名リフとのコンビネーションじゃないですか。なので、当時は“このリフやるんだ！”とか“この曲とメタルのリフって意外と合うな”って思いながら聴いてましたけど、初期のANIMETALさんはわりと昭和の熱血アニメみたいな選曲が多かったと思うんです。私たちが今回選曲したのは最近の曲が多いし、候補曲を探している段階でも感じたのが、バンドで普通にやっても勇ましい雰囲気というか、メタルリフ的なものがすでに入ってる曲が多くて、アニソンは普遍なんだなって。アニメの持ってる世界観って“負けちゃいけない”じゃないですか。その力強さっていうのはメタルと親和性が高いのかなって思いますね。

――アルバムタイトルもすごくいいですね。

SAKI：“Re-Animator”っていうタイトルのホラー映画とかゲームもあるんですけどね(笑)。ちゃんとアニメソングだって分かるものがいいっていうことで、“アニメ”というワードが入っている候補の中からみんなで選びました。

――“アニメイター”っていわゆる動画制作者を指すことが多いけど、もともとの“animate”の意味って“命を吹き込む”って意味なんでしょ？

SAKI：はい。

――その頭に“Re”が付いたことで、曲に新たな命を吹き込むみたいなイメージがすごく今作に合ってると思いました。やはり曲のアレンジの際は Mary's Blood らしさを意識しました？

EYE：曲が出揃った時点で“この曲はどういう方向でアレンジしようか？”ってみんなで話し合ったんですけど、まずバンドサウンドがメインのものにしようって。“メタルバンドだし、重くないと！”っていうのは共通認識として、全ての曲に当てはまるように考えてました。なので、Mary's Blood のファンでアニメを知らない方でも違和感なく聴けると思うんです。また、アニメ好きのメンバーがやっているから、アニメ好きの方に“Mary's Blood は知らなかったけど聴いてみようかな”って聴いてもらっても違和感がない絶妙なポイントを押さえてアレンジしてあるから、そこはどっちも納得させられる自信がありますね。メタルに固定観念を持ってる方がまだまだいらっしゃると思うので、その架け橋になるアルバムになったらいいなって。これをきっかけにライヴにも来てもらえたら嬉しいですね。メタルのライヴは怖くないっていうのを知ってほしい(笑)。

――苦労した曲はありました？

EYE：「ウィーアー！」はアレンジが大変でした。原曲がバンドサウンドではまったくないじゃないですか。ラッパも鳴ってるし(笑)。私の我が儘で入れてもらった曲なんですけど、『ワンピース』のストーリーの友情だったり、ライヴの一体感みたいなものを表す曲を入れたいっていうのもあって、アレンジとか何も考えずに候補にぶっ込んだんです。楽器チームのみんな大変そうだなぁって思いながら(笑)。でも、結果的にそのメッセージとかも伝わるであろう明るいアレンジにできたし、きっとライヴが楽しいと思います。

――「ペガサス幻想」はオリジナルアーティスト MAKE-UP の NoB さんとのツインヴォーカルですね。

EYE：そもそもMary's Bloodのデビュー前、私は NoB さんに歌を教わっていたんです。なので、NoB さんの歌がすごいことはもちろん知っていましたけど、生で聴くと圧倒的に違うんですよ。その尊敬する先生と肩を並べられるくらいのフィールドまで昇り詰めたいと思っていて…結果的に合わせてもらったとはいえ、一緒に歌う、肩を並べて歌うっていうのは夢が叶った感じがありますね。歌の割り振りやコーラスラインなど、歌関係のものは私が考えたんですよ。“ここはツインヴォーカルにしたいから、お互いがハモるようにしよう”って組んだり。NoB さんの発声方法や歌い回しをかなり研究してきた私としては、噛み合いのいいハモリとか、歌の馴染みの良さも聴いてみてほしいです。私のパートを先に入れておいた状態の音源を NoB さんに渡して、抜けている部分を歌っていただいたんですけど、NoB さんがレコーディングで歌っているのを聴いていたら、先に録ってあった自分の歌に納得がいかなくなってきて、“このままではいかん！”と歌い直したりもしたので、その熱意やエピソードも知ってもらった上で聴いてもらいたいですね。またひとつ勉強させられました、今回のレコーディングで。先生はさすがですよ。火をつけられちゃいました(笑)。

――では、SAKI ちゃんのギター演奏ポイントは？

SAKI：今回はバンドさんの曲が結構多くて。アレンジで変えてしまった部分もあるんですけど、原曲のまま弾けるところだったり、印象的なフレーズはちゃんと生かしたいと思ってましたね。「unravel」はイントロのギターが印象的だったりするので、どうやって弾いてるのかご本人の映像をいろいろ観させていただいたりして。「ペガサス幻想」で言うと、サビのキャーンっていうチョーキングは最初は入ってなかったんですけど、これがないと寂しいかなって。「INVOKE」や「Exterminate」は打ち込みモノなので、シンセのサウンドをどこまでギターで再現したらいいのか苦労したところではあるし、楽しかったところでもありますね。

――作品が完成した手応えはどうですか？

EYE：達成感はすごくありますね。自分たちが好きで聴いていた曲を入れてるので、今回は自分でもリピートして結構聴いてます。仕上がったものを改めて聴いてて、“うん、いいね”って思える…自画自賛な感じですけど、満足な仕上がりですね。

SAKI：カバーだから Mary's Blood の作品として異質っていうこともなく、Mary's Blood らしさはちゃんと残せたと思いますね。

取材：舟見佳子

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『Re>Animator』

Album 8/26 Release
徳間ジャパン
コミュニケーションズ

【限定盤】(CD)
TKCA-74894
¥3,364(税抜)
※ PHOTOBOOK 付

【通常盤】(CD)
TKCA-74895
¥2,818(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■ EYE…「World's End」('18)／Mary's Blood
「この曲は Lynne Hobday さんと共同作詞をさせていただいたんですけど、歌詞のやりとりをする中で Lynne さんが「World's End」の仮歌を送ってくださったんです。しかもアカペラで！　アツい歌詞をすごい美声で歌っていただけたことに感動しました。このデータは私しか持っていないので、今でも落ち込んだ時に聴いてます。Lynne さんには今回のアルバム『Re>Animator』でも「魂のルフラン」でコーラスに参加していただいているので、これを聴いて“この声で「World's End」を歌っていたのか!?”と想像してみてください！」

■ SAKI…「FIRE AFTER FIRE」('86)／聖飢魔Ⅱ
「聖飢魔Ⅱさんがすごく好きで、特に「FIRE AFTER FIRE」は自分がエレキギターを始めた高校 1 年の夏に、一週間ひたすらリフだけを弾いて引きこもったんです。それまではクラシックギターしか弾いたことがなかったんですけど、「FIRE AFTER FIRE」をきっかけに真面目にギターを弾くようになったので、未だに思い出深い曲です」

vivid undress

L→R　syunn(Ba)、yu-ya(Gu)、kiila(Vo)、rio(key)、tomoki(Dr)

自分が主役だと思って、もっと自分のことを考えて生きてほしい

昨年末にデビューした vivid undress からメジャー第二弾となるミニアルバム『変身コンプレックス』が届いた。タイトルが示すように変化＆進化がはっきりと見て取れる、メンバー曰く“丸裸な作品”に仕上がった今作。事がここに至った経緯とそこでの心情を kiila(Vo)と rio(Key)が語ってくれた。

――本作は今まで以上に素直な vivid undress が投影された作品ではないかと思います。「主演舞台」の MV などは観る人が観たら“だいぶ変わったなぁ”と思っても不思議ではないほど、ものすごくさわやかですし。

kiila：そうですよね(笑)。特に自分自身が変わっていきたかったというか…もともと強くて、クールに攻めているようなバンドで、そこにいる自分も好きだったんですけど、“vivid undress”として自分はどう生きていくべきか迷っている時期があったんですね。アーティストとしての自分と本当の自分との違いを感じてて、“私ってどういう人？”って周りのいろんな人に訊いたら(笑)、意外と自分が思っていたバンドでの私と周りからの見られ方が食い違ってたんです。よく言われたのが、“バンドの音源を聴いて実際に会ったら、思っていたのと違う”みたいなことで。それは結構言われたから、自分的にはそこの差異を失くしたかったんです。その葛藤から、より自分らしくしたいし、メンバーも斜に構えるような人たちじゃなくて、めちゃめちゃ明るくて、いつも笑っているような人たちなので、“もっと周りに愛されるようなバンドになっていくために変わっていきたい”と強く思っていて。メンバーもそれに賛同してくれたんです。

――メジャーデビューするとメディアに出る機会も増えますし、そうしたところで自分たちがどう見られているかを確認することも多かったんでしょうね。

kiila：そうかもしれないです。迷っていたのもちょうどその時期だったので。

――そう考えると、『変身コンプレックス』はメジャーで 2 枚目の音源ですから、ここで変化が訪れたというのは頷けます。

rio：結果論ではそうです。「主演舞台」を持ってきたのがベースの syunn だったんですよ。楽器隊としては“これはいい曲だからやろう”っていうことで始めたので、やっている当人としてはそこまで違和感なく取り組めたところはあったんですよね。ただ、歌詞が付いて全体像が見えてきた時に“今までとはだいぶ違う作品になる”とは思ったので、不安感がまったくなかったかと言ったら嘘になります。

――そうですか。曲が syunn さんから上がってきた時はいつも通りのとらえ方だったと？

rio：そうですね。これは vivid undress でも全然できるし、“やってみよう！”という感じで。

――そうなんですよね。MV を観る人が観たら“だいぶ変わったなぁ”と思われると申し上げましたが、何が変わったのかを分析すると、実は変わってないところもあって。まず、メロディーは大きく変化していない。もともとこのバンドのメロディーは、歌はもちろん、楽器隊が奏でるリフレインなどもポップなものばかりです。ですから、『変身コンプレックス』にしてもパッと聴きにはそう違和感がない気はします。「主演舞台」の歌メロをはじめ、「感情戦争」のイントロのギターリフ、「ファンファーレ行進曲」のキーボード、どれもキャッチーですから。

rio：それはどこかで零れ落ちてしまうんでしょうね。うちららしさが出るというか。

――はい。では、どこが変わったかと言うと、バンドアンサンブルはかなり変わってますよね？

kiila：それは意識してましたね。今回の作品はもともと“もっと歌を大事にしよう”と思ってて。今までもサビメロはキャッチー、でも A メロ、B メロではこねくり回す…みたいな感じだったんですけど、それをもっと歌にフォーカスを当てるというか。担当ディレクターと話したのは、“kiila ちゃんという人物がどういう人なのかをもっとみんなに見せたいから、歌詞と歌を大事にしよう”ということで、今回はどちらかと言うと削ぎ落とした部分…引き算が多かったかもしれないです。

――ここにいない方の話をするのは失礼でしょうけど、yu-ya さんって歌メロに匹敵するほどキャッチーな旋律を作られるギタリストである印象があるんですが、今回の彼のギターはわりと抑制されてますよね？

kiila：そうなんですよ。yu-ya とも引き算の美学みたいなものをすっごく話し合ったし、彼なりに悩んでいたみたいです。彼も私と同じで“vivid undress としてこうでなくちゃいけない”みたいなものが凝り固まっていて。でも、“それは一旦、やめない？”みたいな感じで話して(笑)。歌を大切にして、出るところは出ると。サポートミュージシャンという感じでやるんじゃなくて、“ひとりのギタリストとして自分の表現を入れることをもっと意識しよう”みたいな話はすごくしましたね。そしたら、むちゃくちゃ引き算してました(笑)。

――「主演舞台」の A メロはほぼギター弾いてないですもんね。

kiila：弾いてないですねぇ。前半はまったく弾いてないです。

――でも、そこが新鮮でとてもいいんですよ。楽曲全体にメリハリが効いていると思います。歌が盛り上がるところで楽器隊もここぞとばかりに一気に出るので、迫力はむしろ増している印象がありますね。ギターが引いた分、今回は鍵盤が目立ってますよね？

rio：そうなんです！　今回、自分がものすごく楽しかったのが印象的だったんですよ。これは本当に恥ずかしいんですけど、あんまりシンセに詳しくなかったのもあって、今までピアノメインのプリセット音源しか使ってこなかったんです。でも、初めてシンセの音源を買ったんですね。最初は不安だらけだったけど、その買ったサウンドが面白くて面白くて。“これも入れちゃおう！　これも入れちゃおう！”って。あと、今回はありがたいことにコミュニケーションをとる時間が多かったんですよ。だから、“ここでこの音を使ったらどう？　これを入れたら楽しくない？”みたいなことをメンバー同士で確認し合いながら…それでギターの yu-ya を抑制したわけじゃないですけど(笑)、自分が思い描く理想として、まさに“引き算の美学”がありました。自分が作曲を担当させてもらった「ファンファーレ行進曲」では“A メロのギターは♪チュルリン～しか弾かないで”って言って(笑)。yu-ya は“えっ!?”って驚いてましたけど、そこで慣れてもらおうと思ったんです。間というか、空白というか、そういうものに沿った音作りにしてみようと。

――そんな『変身コンプレックス』で何が一番変わったかと言うと、これはやはり歌詞かと。今までも決して後ろ向きな歌詞ではなかったですが、今回は超前向きになりましたよね。前々作『赤裸々』(2019 年 1 月発表のミニアルバム)が 70 パーセント前向き、前作『混在ニューウェーブ』(2019 年 12 月発表のアルバム)は 60 パーセント前向きだったとすると、今回は 80 ～ 90 パーセント前向きな印象ですね。

kiila：あぁ…何も考えてなかったですけど(苦笑)。

――つまり、思っていることをそのまま歌詞にぶつけたと？

kiila：そうですね。きっと自分自身のマインドがそっちになっていったんだろうなって。人として素直な変化だと思います。

――「主演舞台」の《私が主役だ！》が本当に力強い。

kiila：…でも、本当にその通りだと思いません？(笑)　みんなが主人公だと。自分の人生って自分しか生きられないってずっと思ってて。私がいくら望んでも誰にもなれないわけですから。もっと自分が主役だと思って、もっと自分のことを考えて生きてほしいと思いますね。

取材：帆苅智之

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『変身コンプレックス』

Mini Album
8/19 Release
徳間ジャパン
コミュニケーションズ
TKCA-74886
¥1,800（税込）

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■ kiila…「ザ・クライム」('09)／マイリー・サイラス
「すごく励まされる歌詞なので、上京したばかりの頃は何度も聴いて踏ん張ってましたね。《Keep on moving Keep climbing》っていう…どれだけ早く辿り着けるかとかじゃないし、どれだけ結果が出せたかとかでもなくて、大切なのは登り続けることっていう、“ずっと自分を信じ続けることが大事だ”っていう歌詞に励まされていました。マイリー・サイラスはもともと好きだったんですけど、もうこの曲しか聴いてないくらいです(笑)」

■ rio…「空と君のあいだに」('94)／中島みゆき
「親がピアノの先生だったので基本的にクラシックばかり聴いていたんですけど、大好きだったドラマ『家なき子』の主題歌ということもあって好きになって、この曲で J-POP に目覚めたというか、“J-POP って楽しい！”と思って 90 年代の J-POP の研究をするようになったんです。なので、自分にとって転機になった曲なんです。当時は中島みゆきさんのラジオ番組『お時間拝借』も聴いてましたね」

L→R　タクマ(Gu&Cho)、モリユイ(Vo)

今まで感じたことのない アグレッシブなオケがどんどん出来上がってきた

しなまゆのメンバーとして 2011 年から活動してきたモリユイ(Vo)とタクマ(Gu&Cho)が、“Oh my!”とバンド名を新しくして 1st ミニアルバム『SPARK』を完成させた。タイトルが表す通り、そこには“振り切った強さ”を感じる楽曲が並んでいる。ふたりは再びどんな道を進もうとしているのか話を訊いた。

――メンバーの脱退を経て“しなまゆ”から“Oh my!”という名前になり、初めての作品『SPARK』が完成しましたが、どんな想いで本作の制作に向き合いましたか？

モリ：レコーディングの直前にベースのウエノハラが辞めるという話が出たんですね。いい部分だけ言えば、今までは 3 人だったからバンドである意識が強くあったのが、タクマとふたりになったことで、その意識がちょっと薄くなりましたね。もちろんバンドサウンドは大好きな音ですけど、もう少し自由に“相棒と音楽ができるんだ”という感覚になったというか。それでアルバムを作ったら、ふたりだけの曲だったり、トラックにふたりで参加する曲ができたりとすごく新鮮だったんです。この相棒感というのは、他の人では得られないと私は思っています。

タクマ：僕もそうですね。ユイとは高校の時からの付き合いなんですよ。

モリ：私、自分の恋人とタクマが崖に落ちそうになって、どちらかを助けなきゃいけないとなったら、タクマを助けてしまうかもしれない(笑)。もしタクマが臓器を必要としたら、きっと出しますね。

タクマ：それは僕も出すよ。だけど、崖は分からないな。恋人に恨まれたら嫌だし(笑)。

――名前を変えたのも大きなことですよね。

モリ：“しなまゆは一生解散しません”とずっと言っていたんです。だから、それを信じて好きでいてくれたみなさんが名前を変えると聞いて、裏切られたと感じてしまったらどうしようと思っていました。ただ、名前を変えること自体は 3 人の時から出ていたんですよ。なので、ふたりになったタイミングで、メンバーが抜けたことによって寂しく不安な気持ちはもあったし、新しいステップに進むいい機会かもしれないと話し合って変えました。

――レコーディング自体はスムーズに進んだのでしょうか？

タクマ：ベースが抜けるという話があったあと、すぐに動き出さなくてはいけなかったので、僕の周りで信頼しているベーシストに連絡したら“やります”と言ってくれて。スタジオに入ったら僕らとすごく合ったし、ドラムもベースと別の現場で一緒にやっていた方なので、リズム隊の息もぴったりだったんです。

モリ：今回は自分以外が男性だったので、今まで感じたことのないアグレッシブなオケがどんどん出来上がってきて新鮮だったし、メンバーが抜けて弱っている私たちにとって“こんなに頼れる人たちがいるんだ！”という想いもあり、嬉しかったです。みんなから刺激を受けたし…「愛と気づけば」や「何者」など結構訴えるメッセージが強い曲があったので、この切羽詰まった感が良かったんじゃないかなって思います。

――先ほどお話にも出た 4 曲目「愛と気づけば」は、何度も転びながら夢に向かって進んでいく強さが歌われている楽曲ですが、そこにはどういった背景があるのでしょうか？

モリ：もともと 2 年前くらいにできた曲なんです。ちょうどその頃、同い歳だったり、肩を組んで“一緒にやっていこうぜ”と思っていたりしたバンド仲間が結構辞めてしまって。“あんなに楽しいことがいっぱいあったのに”という寂しさを、自分たちの支えにしたいという想いがあったんです。あと、一番仲の良い地元の子たちが活動休止というか、今までのかたちでは続けられないという話を聞いて、その子たちの最後のライヴの時に披露したくて。その時の歌詞は今回とだいぶ違うんですけど、メッセージとしては近くて…なので、贈りものみたいな感じで作りました。

――今回のご自身のバンドでのことにもつながっていますよね。

モリ：偶然にも噛み合ってしまいましたね。

タクマ：僕たちもウエちゃん(ウエノハラの愛称)のことと思われちゃうんじゃないかって不安になったり…。

モリ：ウエちゃんが辞める前からこの歌詞は決定していたんですよ。だから、“ウエちゃんのことを怒っているふうに思われちゃったらどうする？”みたいな話をしていたんですけど、“そこはちゃんと説明すればいいじゃない”って。

――レコーディングで新たに挑戦したことなどはありますか？

タクマ：バンドで録っている曲のベーシックトラックは全部一発録りで、それ自体はしなまゆの頃からそうなんですけど、今回の楽曲こそそのシステムが合っていたとすごく感じました。

モリ：レコーディングブースから録り音の確認で戻ってくる時、みんな侍のような表情だった(笑)。“男性ばかりでやるとこういう感じになるんだ”と思いましたね。タクマがすごく楽しそうでした。

タクマ：今までは女性ヴォーカルというのもあるし、周りのチームも女性が多かったんですけど、男だけでやる感じというのが、なんか部活を思い出しましたね。レコーディングしている最中は本当にワクワクドキドキで、苦なことなんてひとつもない…みたいな。

――1 曲目の「I Wanna Know!」はスタートに相応しく、一気に盛り上がる楽曲ですが、以前とバージョンを変えて収録されているそうですね。

モリ：ライヴで前から演奏していた曲だったんですけど、アルバムに入るとなって、さらにブラッシュアップしました。曲の内容がさわやかな恋愛というか、甘酸っぱい初々しい感じだったので、そういう部分が分かりやすくイメージされるようなものにしましたね。

――「地球最後の夜に」も Oh my! のバージョンで、これはピアノの印象が強いです。

モリ：リメイクして、かなり表情が変わったと思います。前回のは結構バンドのハンドメイド感みたいなところを前面に出して作ったので。

タクマ：セルフプロデュース感が出ているというかね。

モリ：“地でいくバンド感”みたいなのを重視して作ったんですけど、今回音が変わるとなった時に、もう少しキラッ！としてもいいんじゃないかということで、サウンド感を意識して変えました。

――最後はアコースティックで少し切ないイメージがある「杏のジャム」ですが、この曲については？

モリ：ふたりになったんだし、せっかくだからふたりきりの曲があってもいいかもって。私、ずっとやりたいテーマがあったんですよ。最初のうちはちやほやされて、美味しい美味しいと食べられていた杏のジャムが、変わったフレーバーだからだんだん冷蔵庫の奥のほうに追いやられ、誰も手を出さなくなるっていう。結局は“いちごのジャムだったら食べてもらえたかもね”みたいな。そういう寂しさみたいなものと、付き合ったふたりが一緒に住むことになって、最初は何ごともキラキラしてて楽しかったけど、だんだん慣れていって、ふたりの仲も冷めていくという情景が、すごい合うんじゃないかなと。

取材：キャベトンコ

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『SPARK』

Mini Album　8/26 Release
フォーライフミュージックエンタテイメント
FLCF-4522
¥1,636(税抜)

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■モリユイ…「ごめんね」('10)／ふくろうず
「曲というよりもバンドなんですけど、ふくろうずが大好きなんですね。高校生の時に友達から教えてもらった時から、私の人生だったり、恋愛の取扱説明書がここにある！ってくらいに大好きなバンドなんです。フィーリングなのかな？　それまでは aiko や YUKI、椎名林檎とかの女性アーティストだったり、バンドでは BUMP OF CHICKEN とかを聴いてたんですけど、ふくろうずに出会った時、“あっ、これは私の歌だ！”って思ったんですよ。“私のためにあるバンドだ！”って。「ごめんね」という曲でふくろうずを知って、解散してしまった今でも世界で一番好きなバンドなんです…ってメンバーの内田万里さんにも言ったくらいですからね。その時は“あっ、そういうのはいいです～”ってあっさりと言われたんですけど(笑)。なんか、そういうところも好きなんですよ」

■タクマ…「New Animal」('08)／ the pillows
「中学校の時に iPod shuffle を持ってて、お母さんに毎月 3 曲ずつ iTunes からダウンロードしていいって言われていたんですね。だから、ボルノグラフィティや GReeeeN とかの当時流行っていたものをダウンロードしてたんだけど、なぜかその中に the pillows の「New Animal」があったんです。何かがビン！と来たんでしょうね。僕、ギターを始めたのは高校生になってからだから、ギターのことなんて何も分かってなかったのに、なんかカッコ良いと思ってたんですよ。で、高校生になって軽音部に入り、そこで初めて組んだバンドのギターの子に“このバンドをやりたいんだよね”と言わって聴かされたのが the pillows で、そのバンドで初めてコピーしたのが「New Animal」という。僕らの世代で the pillows を聴いてる人なんてほとんどいなかったから、そのギターの子との出会いは奇跡でしたね。もちろん今でも the pillows は大好きです！」

Gorilla Attack

強者ならではの孤独を受け入れるゴリラの振る舞いに憧れるふたり組

昨年８月に 1st シングル「Gorilla Anthem」をドロップした際、水溜りボンドのカンタ（佐藤寛太）が監督を務め、俳優の清水尋也が出演し、100 万回以上の YouTube 再生回数を記録したその MV にも一切姿を現さなかったメンバーの“正体”をめぐって、界隈をざわつかせた Gorilla Attack。彼らがリリースする 1st EP『GORILLA CITY』は、ダークなオルタナティブ R&B のニュアンスを纏ったトラック上を変幻自在なヴォーカル＆ラップが交錯する限りなくノンフィクションに近いフィクションといった印象の一枚だ。

――どういう目的でこの Gorilla Attack を結成することになったんですか？

ヒガシ：僕たちはヒガシローランド（以下、ヒガシ）とニシローランド（以下、ニシ）と、それぞれ代表的なゴリラの種別を名乗ってるんですけど、ヒガシとニシはゴリラになりたいんですよ。

――なぜゴリラなんですか？（笑）

ヒガシ：ゴリラは非常に力強くかつ気高いんですけど、ちょっと哀愁が背中にあって。あまりに強力な存在ってむしろ孤独だったりするし、他の弱い人たちから妬まれたり嫌われたり、強者は強者なりの悲しいことがあるけど、その事実を受け入れてジャングルの王者たる振る舞いをしているっていう意味で、ゴリラはカッコ良いなと思ってて。それがヒガシとニシの共通の見解で、“ゴリラに憧れるふたり組”なんです。

――昨年に配信リリースされた「Gorilla Anthem」はまさにアンセム的な楽曲でしたが、今回の EP も物語性が高いように感じました。コンセプトは明快だったんですか？

ニシ：コンセプトは「Gorilla Anthem」の時からがっつり固まっていて、それをもとに“ゴリラがこんなところに行ってみよう、いろんなことをしてみよう”みたいなイメージでした。“もしその状態のゴリラだったら？”って曲もありますし、今の自分に置き換えて“ゴリラはこんな強いのになぁ”みたいな曲もあります。「Gorilla Anthem」が核としてあることによって、制作はスムーズに進みましたね。物語が自分たちで意識せずともできたみたいな。

――「Gorilla Anthem」の主人公はあくまでも今の都会の若者で、でも今の生き方に嫌気が差してるように聴こえました。このユニットのマインドもそういうところに？

ヒガシ：Gorilla Attack 自体のコンセプトというか、掲げてるテーマみたいなものとして、サビの一行目の《Gorilla みたいに生きられたら こんな幸せなことはないな》というワードはユニットとして一番大事にしている文章ですね。やっぱアンセムなので、“ここに立ち戻ってくる”みたいなことをすごく思いながらやっています。

――設定としては東京、特に渋谷というロケーションも見えてきます。その辺りは意識的ですか？

ヒガシ：渋谷は日本のコンクリートジャングルですので。本当のゴリラは本当のジャングルにいるんですけど（笑）、Gorilla Attack は都会に、街にいるよと。そういう感じです。

――おふたりにとって渋谷ってどういうところですか？

ヒガシ：結構よくいるので、僕は。ニシに初めて会ったのも渋谷だったよね？

ニシ：確かに。

ヒガシ：思い出深い土地ではありますね。かつ象徴的で…曲中にも出てくるんですけど。「隔世 gorilla」かな？

――《PARCO の下抜けてさ WWW にめがけて Dive》って？

ヒガシ：そうです。他にも景色そのものが鮮やかに残ってる土地ではありますね。

――ニシローランドさんにとっては？

ニシ：流行りが生まれる土地というよりは、流行りが拡散されていく街なのかなと思っていて。言っちゃ悪いですけど、ミーハーみたいな感じが少しありつつも、やっぱりそういう場所って大事じゃないですか。何かが広がっていく場所って、良くも悪くもなんですけど。“渋谷”と聞いたらちょっと身構えますよね。どっちかと言うと、人混みとか嫌いなタイプなんで、普通に“渋谷”って聞いたらキュッてなる。全然、Gorilla Attack 関係ないね（笑）。

――この EP は曲の並びからしてコンセプチュアルな感じがしています。まず 1 曲目が「Gorilla Step」。第一歩って感じがしますが、この曲の共同プロデュースを Yaffleさんに頼んだ理由は？

ヒガシ：トラックメーカーは全部、僕とニシで選んでいます。藤井 風さんのアルバム『HELP EVER HURT NEVER』がすごく好きで、Yaffle さんがアレンジ面を全編手がけられてるということから一回一緒にやってみたいと思って声をかけました。

――いわゆる普段の Yaffle さんが作るトラックのタイプと違ってて、変形2ステップみたいな面白い曲ですね。これはどれぐらいの原型がおふたりの中にあったんですか？

ヒガシ：僕たちはトラックメーカーの人たちから“何が出てくるかなぁ”と楽しみにしてるところがすごくあるから、あんまり指定しないですね。コンセプトを伝えるぐらいで。

ニシ：Yaffle さんの曲に関しては“2ステップ”ってワードが出てくるのが早かったような気がする。

――「隔世 gorilla」にはインダストリアルテイストもあるし。

ヒガシ：あぁ、そのトラックは特にそうかもしれないですね。

――これは Loyly Lewis（ケンカイヨシ）さんにどういうイメージを伝えたんですか？

ヒガシ：これ、どうだったかな？ 確かゴリラが覚醒していくみたいなことだけを伝えてたような…。

――3曲目の「月」には Gorilla Attack の恋愛観みたいなものを感じました。

ヒガシ：まぁ、そういう曲です。人が人といるってことは、それだけで難しいことでもあるし。バイオリズムというか、単純に朝起きただけで“今日は調子いいな”とか“調子悪いな”みたいなことがあるじゃないですか。それが複数の人間がいるとさらに歪みみたいなものがどんどん生じてくる。ずっと幸せではいられないっていうのはあって、そこから目を逸らすラブソングはあんまり意味ないなと。僕にとっての恋愛は、日常にひそむ淀みこそが本懐であるように思えて、そういうリアリティーみたいなものを描きたいっていうのはありましたね。

――ゴリラなら話はもっとシンプル？

ヒガシ：そうですね。力強くやさしいですからね。けど、そうなれないんです…。

――そうなれない人類っていうのを全肯定してるわけではないし、仕方ないと言いながらゴリラに憧れてるのが Gorilla Attack の世界観なのかなと。

ヒガシ：まさしくそうだと思います。

――「ゴリラ・バカンス」は洒落が効いてますね。

ヒガシ：あははは。この曲は結構ニシが主導で作ってて。

ニシ：自分たちの象徴でもあるゴリラがバカンスに行ったらどうなるんだろ？…みたいな。いわゆるハワイやグアムに行ってみたいとかの典型的なバカンスとは違うんだろうなと思って作ってみたら、なんかすごい変な曲になりました（笑）。

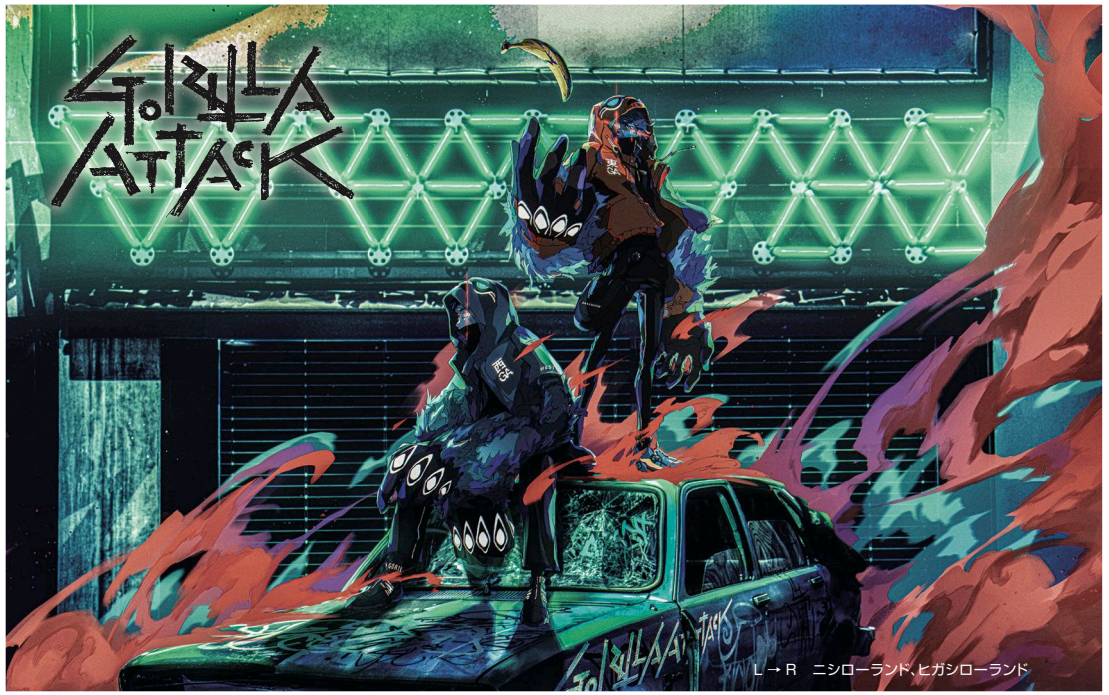
――「Gorilla むかしばなし」は最初にもおっしゃっていたように、なぜゴリラなのかの世界観の説明としてすごくしっくりくる曲ですね。

ヒガシ：この曲、雲のすみかというトラックメーカーとやってるんですけど、彼のテイストを活かした曲が作りたいと思ってトラックをお願いしました。何パターンか出してもらった中でこれがいいなと。あと、どこか和を想起させるようなトラックなので、昔話っていうのもいいなと思って、“ゴリラ昔話”みたいな感じでいこうと。ヴァースの書き出しを《むかしむかし あるところに》にするっていうことだけを決めて、ニシとふたりで歌詞を書き始めましたね。何らかの昔話をオマージュしつつ、ゴリラをマッシュアップするみたいな感じで作りました。最終的にはもうちょっと壮大になっていくんですけど。

――確かに壮大なストーリーテリングですね。フィクショナルなんだけど、街を俯瞰している気分になります。では、最後に Gorilla Attack としては今後どういう活動を？

ヒガシ：ライヴやりたいですけどね、ゴリラ感を出しつつ（笑）。今後のこともちょっとずつ考えていますよ！

取材：石角友香



L→R　ニシローランド、ヒガシローランド

okmusic
このインタビューの全文を公開中!!▶

『GORILLA CITY』

EP　9/9 Release
A.S.A.B
【CD+T シャツ】
RZZB-87025
¥5,000（税抜）
【CD】
RZCB-87026
¥2,000（税抜）

music UP's Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■ヒガシローランド…「魔法 feat. ちょまいよ」（'12）／古川本舗
「リリース時もよく聴いていた曲ですが、最近聴き直して良さを再確認しました。歌い出しのフレーズが本当に良くて、急に思い出す時があるんですよね。そういう曲ってひとつの思い出というよりは、生活の中に出てくる大切な一曲なんだろうなと思います」

■ニシローランド…「TIME シャワーに射たれて…」（'86）／久保田利伸
「親の趣味で幼少期に車の中で流れていた一曲です。サビが特に印象的で、今でもいいなって思いますね。最近で言うと 3 カ月前くらいに聴いてました。この曲は行き詰った時に聴くと現実に戻って来れる感覚があるんです。小さな頃に聴いてた曲って、なんか身体に馴染んでるんですよね」

写真左より時計回りに、ハマ・オカモト(Ba)、
オカモトコウキ(Gu)、オカモトレイジ(Dr)、オカモトショウ(Vox)

OKAMOTO'S

いろいろな意味で極端な曲も EP だったら入れられる

新たな面を打ち出した表題曲をはじめ、OKAMOTO'S の持つさまざまな魅力を印象づける全 6 曲を収録した EP『Welcome My Friend』。同作についてオカモトショウ(Vox)とオカモトコウキ(Gu)に語ってもらったところ、11 年目を見据えた上でまだまだ攻めていくという予告編でもあるとのことだった。

――EP『Welcome My Friend』を聴いて、改めて OKAMOTO'S はカッコ良いロックバンドだと思いました。一曲一曲のカッコ良さもさることながら、怒りなのか、鬱憤なのかはっきり分からないのですが、今にも何かが爆発しそうなスリルに満ちているところとか孤独や虚しさも歌っているところなど、デビュー 10 周年を迎え日本武道館をいっぱいにしたバンドが、11年目のスタートにこういう作品を持ってくるのかと。

ショウ：今回は全曲、コウキと俺がふたりで一緒に書いているんです。これまではそれぞれにデモを作って、4 人でアレンジしてきたんですけど、昨年『HELLO WORLD』という映画の劇伴を俺らがプロデュースさせてもらった時、デモの精度を上げなきゃいけないことになり、コウキと一緒に作るってことをやり始めたんですよ。そこから、“ふたりで作ると、いい曲が書けるから続けてみよう”と作った 30 曲の中から選んだ曲が今回の EP に入っています。だから、セレクトの話になると思うんですけど…どうですかね？　エネルギッシュな部分と切なさというか、孤独を歌った部分が言われてみると確かにあるんですけど、そうしようという狙いみたいなものはなかったですね。10 年やってきて、初めてベスト盤を出して、一度まっさらにしてから新しい一歩を踏み出したい気持はありましたけど、だからってものすごく新しさを出したかったわけでもなくて。でも、最初の一歩は重要だと思いながら作っていました。武道館をいっぱいにして満ち足りた気持ちになっていちゃいけないなって、どこかハングリーさみたいなものがあったのかな？　10 代後半の頃とはまた違う質の 30 歳になった俺たちのエネルギーみたいなところだと思うんですけど、そこは出したいし、出さないといけないと思っていたので、そういうメンタルが表れたセレクトなのかも…と今、話を聞いて思いました。

コウキ：そうですね。僕らは音楽的な面白さで判断していくバンドなので、メッセージやコンセプチュアルな打ち出し方は気にしていなかったんですけど、30 曲作ったデモには今回の EP に入っているようなムードが共通してありますね。わりとどれを選んでも同じムードにはなったかもしれない。

ショウ：そういう意味では、コウキと俺のムードなのかもね。

――タイトル曲の「Welcome My Friend」は、テレビアニメ『富豪刑事 Balance: UNLIMITED』のエンディングテーマでもあるのですが、書き下ろしたわけではなくて、30 曲の中から相応しい曲を選んで提案したと？

ショウ：デモとしては、そうですね。お話をいただいて、この曲が合うだろうって決めて、歌詞は脚本を読んだ上で書きました。そういう意味では書き下ろしと言えるんですけど、せっかくなんだから自分たちにとっていい手札を切ったほうがいいということで、この曲を選んだところもありますね。

――どんなところがいい手札だと？

ショウ：“肩の力を抜いた OKAMOTO'S”と監督に言われたんですよ。

コウキ：ロックサウンドで攻めるというよりは、斜に構えた感じでハードボイルドに…

ショウ：“クールでお洒落”みたいなキーワードをいくつかもらって、この曲を選びました。もちろん、“この曲、カッコ良いね”ってメンバー 4 人がなった上でなんですけど。あとは、今年の頭ぐらいにいただいた話だったので、11 年目の最初に出る曲になることは分かっていたから、その見え方として、この曲の新旧入り混じった感じ…あくまでもバンドサウンドだし、特別に今っぽい何かがあって引っ張っていく曲ではないんだけど、ヒップホップのエッセンスがちょっとありつつ、昔ながらのバンドがただやっているだけじゃないというエッセンスが浮かない程度に散りばめられている具合が、OKAMOTO'S の次の顔に相応しいと思ったところはありました。

――その他、バンドが自由に曲を作ってきたことがうかがえる、それぞれに違う魅力を持った 5 曲が収録されていますが、その 5 曲はどうやって選んだのでしょうか？

ショウ：6 曲目の「History」にはひとつ理由があって、映画『十二単衣を着た悪魔』が 11 月 6 日に公開になるんですけど、その主題歌として書きました。だから、「Welcome My Friend」と作り方としては同じで、デモの中から選んで、映画を観た上で歌詞を書いたんですよ。監督の黒木 瞳さんが俺らの「BROTHER」(2016 年発表のシングル)という曲を気に入ってくれていて、映画のエンディングに「BROTHER」を当てつつ“こういう曲を書いてほしいです”と依頼してくれたんです。ちょうどコウキと「BROTHER」や「ROCKY」から発展したような曲がもうちょっとあってもいいかもと話しながら書いていた曲があったので、それをもとに「History」を作りました。

――なるほど。映画のエンディングに流れるわけですね。そう言われてみると、確かにエンディングに相応しい曲に思えます。

ショウ：映画はタイムスリップの話なんですよ。タイムスリップした主人公が歴史の重みを感じるというか、歴史の波に飲み込まれていくんで、俺は“今の自分たちの人生はいろいろな人の人生があったからこそ”みたいな解釈をしたんですけど、ちょうど歌詞を書いたのが武道館を終えたあとだったから、自分たちの 10 年を思い返したところとリンクする部分があるといいなと思っていました。だから、「History」と「Welcome My Friend」は、ありがたいことに外からのお話があって選ばれた曲たちでしたね。

――その他の 4 曲はバンドの攻撃的な面と哀愁や泣きの魅力を物語っていますね。

ショウ：EP の良さって短さにゆえに、集中して聴けるところにあると思うんですよ。だから、シングルに相応しいわけじゃないんだけど、何か光るものがある曲は、EP に入れたら何回も聴いているうちに“やっぱりいいね”ってなるんじゃないかな？　アルバムに入れちゃうと注目度が薄れちゃうかもしれないって、そんな選考基準もあった気がするんですけど…コウキさんはどう思いますか？

コウキ：そうですね。いろいろな意味で極端な曲も EP だったら入れられるってことで、ネタじゃないですけど、2 曲目の「THE BEAR」はパロディーみたいな勢いで、歌詞も含めて“ここにだったら入れられる”ってのはありました。あと、これは聴く人は意識しなくてもいいと思うんですけど、30 曲ある中に“これは明らかにシングルだろう”とか、“これはアルバムのリード曲だろう”という曲が、実は結構あるんですよ。ショウと僕の中でそれらを 11 年目の OKAMOTO'S の顔にしていこうと決めているんですけど、それを見据えた上での、ある意味予告編なのかな？　“11 年目も攻めていきますよ”みたいなことを最初に伝えられるセレクトになっていると思います。全曲、楽しそうで生き生きとしていますよね。

取材：山口智男

OKMUSIC
このインタビューの全文を公開中!!▶

『Welcome My Friend』

EP　8/26 Release
Ariola Japan

【初回生産限定盤】
(CD+Blu-ray)
BVCL-1097～8
¥3,000(税抜)
【通常盤】(CD)
BVCL-1099
¥2,700(税抜)

MUSIC UP'S Q!　今月のお題：『思い出深い一曲』

■オカモトショウ…「キングスネークブルース」('75)／サンハウス
「サンハウスは中高生の頃からずっと大ファンなんですよ。ツアーで福岡に行った時はオリジナル版のレコードが売ってないか必ずチェックします。一気には手に入らないので、少しずつ集めていくみたいな。今まで鮎川 誠さんのライヴや柴山俊之さんの Zi:LiE-YA というバンドでサンハウスの楽曲を聴いたり、演奏を観たりはしていましたけど、2000 何年だったかな？　まさかのオリジナルメンバーでの再結成ライヴを恵比寿リキッドルームで観れることになりまして。その時の鬼平(坂田紳一)さんのグルーブがめちゃくちゃ良くて！　“やっぱりサンハウスは、この人のビートなんだ”っていう気持ちになるくらいシビれましたよ。もう聴けないと思っていたから“そうそう、この感じ！”って。それで、「キングスネークブルース」はアルバム『有頂天』の 1 曲目だったから思い出深いと思って挙げました(笑)」

■オカモトコウキ…「ババ・オライリィ」('71)／The Who
「僕もライヴで印象深かった曲なんですけど、The Who が 2008 年に初の単独公演で来日した時に観に行ったんですよね。そのライヴでこの曲を演奏していたのを観て、めちゃくちゃ感動した思い出があります。だから、心に残る一曲と考えるとこの曲が出てきますね。彼らは 2004 年のフェスと 2008 年の単独公演しか来日していないので、また聴けるチャンスがあればいいなと心待ちにしています」

music UP's

TAKE FREE

Interview … GRANRODEO、BUCK-TICK、内田雄馬、HoneyWorks、松尾太陽、むぎ(猫)×つじあやの
Editor's Talk Session …『配信ライヴが今後のシーンにもたらすもの』
music UP's Q! …『思い出深い一曲』